

---

# GUILD WORKER

TON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

GUILD WORKER

### 【コード】

N6654U

### 【作者名】

TON

### 【あらすじ】

ひよんな事から「アースワールド」の地。「アイデア」に存在する私設武装ギルド「アイゼンフォート」。

気取らずに呼ぶと「便利屋」に所属する事になった主人公「レイヴン」が、個性的な仲間達と共に、様々な依頼や事件を解決したり、しなかつたりするストーリー。

## 1話 プロローグ的な何か

「アースワールド」。

この惑星には数多の大陸が存在し、土地ごとにそれぞれ違った文明や文化が築かれている。

科学的に発展した土地もあれば、古き敷きたりを守って暮らす土地もある。

そして此処、サンライズタウンも大陸の一部だ。

農業が盛んで、都会から離れた場所に位置している町だ。一部では地図に載ってるのが不思議だと言われているが、それが何だと民は貧しいながらも助け合い暮らしている。

「この町とも暫くお別れだな」

「もう行くのか…レイヴン？」

「ああ…てなワケで、以前修理に出したヤツを頼む」

町で唯一と言われている寂れた武器屋。数多くの剣や銃器が店内の壁に飾られ、カウンターのショウケースの中にも同様に武器が並べられている。その薄暗い店内で今、二人の男が話しをしている。

一人は無精髭を生やした初老の男性。武器屋の店長だ。そしてもう一人は「レイヴン」と呼ばれる若者。見た目は二十代前半ほどか。

黒髪に真紅の瞳。漆黒のロングコートを羽織った怪しい姿が人目を引く。

「一応直ったが、その武器は寿命を過ぎてる…新しいのに交換したらどうだ？」

店長は「リペア」と書かれた小包サイズのダンボール箱を棚から取り出し、レイヴンに受け渡すと同時に新品への買い換えを薦める。

「遠慮する。コイツには愛着があるからさ」

「なら、もっと丁寧に扱いやがってたんだよ」

店長は買い換えを断るレイヴンのこだわりが良く分からないといっ

た感じに、その愛着ある武器を修理しなければならない原因を笑顔で指摘した。

「世話になったね店長…また会おう」

「ああ…それまで達者でな」

レイヴンは店長と再会の約束として握手を交わすと、小走りで店を後にしていった。

「店長、今戻りました」

レイヴンが店を後にして暫く経ってから、裏口から店員の男が入って来た。

「おう、お疲れ…もう少し早ければレイヴンに会えたぞ？皆に宜しくってな」

「えっ？今日立っただんですか！？」

店員の男はレイヴンの突然の旅立ちに驚く。男も前からレイヴンとは常連と店員同士として付き合っており、彼が気分屋だということは知っていたが、今回の不意打ちに近い突然の旅立ちだ。

「店長…彼は結局何者なんです？」

「俺にもよく分からないんだよ…ある日ふらっと現れてな、あまり自分を語るうとしない奴だったよ」

店長は彼との最初の出会い、あの嵐のような出来事を思い返して微笑するが、それはまた別の話である。

「なんだ…付き合い長い店長でも知らないんですか」

当時の様子を知らない店員の男は、あまり納得いかないような表情で床に散らばった工具を片付け始める。すると店長は椅子から立ち上がり、思い出したように口を開いた。

「そうそう、もう一つ分かる事といや…退屈が嫌いな奴だったって事か」

店長にとっては彼が何者でも構わなかった。店の常連で、誰よりも退屈を嫌い、常に刺激を求めて動き回る気分屋。まさに渡り鴉な男。レイヴン…だったという事で十分なのだから。

## 2話 街に到着しました(前書き)

話の都合により早く到着したようです

## 2話 街に到着しました

町を離れてから丸三日が経った。

此処は「アルカディア」と呼ばれる都会の駅ターミナル。通勤や物資の輸送で多くの人や電車が行き来している場所だ。

「やれやれ…ありがとよポンコツ」

レイヴンは別のホームで停車しているリニアモーターカーと比べ、明らかに時代遅れな蒸気機関車を下りて皮肉な礼を呟くと、早速地図を広げて目を通す。何せ「サンライズタウン」と違って駅だけで広大な土地だ。

駅としての機能の他に、喫茶店。土産屋を始めとした店も多数あり、殆どデパートと合体している状態である。人でごった返してる中、良い歳して迷子になるなんて馬鹿馬鹿しい。

「先ずは…外だな」

喫茶店で一服しても良かったが、とりあえずレイヴンは駅の外を指す事にした。この街に来た目的は観光なんかでは無いのだから。

5

レイヴンは待ち合わせ場所として使われる駅前の噴水広場を目指し、田舎のトラクターの三倍で動くであろう乗用車が通り過ぎるまで横断歩道で待つ。

（何かやってるな…？）

その広場が人集りで妙に騒がしい様子だと、この位置からもハッキリ確認出来る。

信号が青に変わると、レイヴンも足早に野次馬に混ざり、騒ぎの中心を覗こうと背を伸ばす。

「そっちのエリアはどうだ？」

「異常ありません！！」

妙に慌ただしい様子の男達が同じ灰色の服を着込み、物騒な「ビームライフル」を構えて整列している。

(大連の奴等か…)

レイヴンは、あの灰色の軍服は間違い無く、大陸連合軍の奴等だと分かった。

大陸連合とはこの街。`アルカディア`に本部を構え、他の土地にも幾つかの支部が存在している大規模な軍だ。

「おい、一体なんだってんだよお!？」

昼間から酔っ払った野次馬のオヤジが、不安から大連の隊長へ喧嘩越しに尋ねる。

「現在調査中です」

他の隊員と違い黒い軍服を身に付けた隊長格の男は、マニュアルブックの台詞をそのまま吐き出すようなアルバイト学生の如く、淡々と同じ台詞をオヤジや、市民一人一人へ繰り返していた。

「慌ただしい街だな…」情報を仕入れたいとこだが、大連の奴等には何を言っても通じないだろうと、レイヴンは肩を竦めながら諦めて野次馬の列を後にしようとする。その時であった。

「隊長…!!!」

「……何だ？」

通信機を片手に隊長を呼ぶ隊員の姿をレイヴンは見逃さなかった。会話の内容までは分からなかったが、隊員の表情を見る限り事件なのは、ほぼ間違い無いと思った。

(ようやく遊べそうか…?)

隊員数名を広場に残し、隊長は道路に停車していた重厚そうなジープへと小走りで向かい、助手席へと乗り込む。

(やれやれ…車かよ)

レイヴンは少々骨が折れそうだが、面倒なだけで不可能ではないと皮肉り、走り去っていくジープの後を追う事にした。

遠く離れた雑居ビルの屋上から、鋭い視線で地上を見下ろす者がいた。

「クソツタレ…!!!」

浅黒い肌に上下共に黒いジャージを身に付けた男は、スポーツしに来た者では無い。その目には明らかに殺意が込められている。

「落ち着け…大陸連合も少しは進歩したんだろうよ」

金髪のオールバック。黒いワイシャツに、上下共に目立つ白スーツを身に着けた長身で柄の悪そうな男は、背後から窺めるように声を掛ける。此方はジャージ姿の男とは対照的で綺麗な身成りだ。

「アーリマン様…奴等は此方の存在を意識し始めたんですかね？」

「かもな…それでも勝てねえよ。俺達、闇魔族にはな」

退屈そうに欠伸をし、アーリマンは空間から出現した半透明に揺らめくカーテンのようなゲートへと歩み寄る。

「だりいから先に戻る…俺は忙しいからな。後は自由にしろ。」

揺らめくゲートに吸い込まれるように姿を消したアーリマンを見送り、ジャージの男は振り返る。

地上には何時の間にか大陸連合の小隊が迫っていた。

「さアて…死ぬぜ。俺を邪魔する奴は皆死ぬぞオ！」

ジャージの男は狂喜じみた表情で叫ぶ。たった今からこの街は彼の狩場になるうとしていた。



3話 よくある登場だよね(前書き)

短く終わり、グダグダは続きます。

### 3話 よくある登場だよね

「撃て！！撃てッ！！」

裏路地に銃声が響き渡る。

大連の隊員達は建物をよじ登る黒い影を撃ち落とそうとライフルを構え、ビームを何発も撃ち込むが、その影は俊敏な動きでそれを回避していく。

「くっ… たった一匹に！！」

「増援はまだですか！？」

小隊の銃撃が収まり、建物の壁にピタリと張り付いた影は動きを止めてその姿をハッキリと現す。

不気味な白眼に鋭い牙。四足で這いつくばるように移動し、肉の腐ったような紫色の皮膚からは得体の知れない粘着いた汁を垂れ流している。

「怯むな撃…ぐあッ！！？」

正体不明の生物に半ば恐慌状態になりかけている隊員達へ隊長が声を掛けようとした瞬間、隊長の腕から鮮血が飛び散る。

「ヒヒッ… 狩りの邪魔をするなよ雑魚が！！」

隊員が振り向いた時には既に遅く、目の前には右腕が獣のような形に変化しているジャージ姿の男が、鉤爪に付着した血を舌で舐めまわしていた。

「くッ… 隊長！？」

「おっと、人の心配かよ？」

激痛に悶え必死に傷口を手で抑える隊長と、それを介抱しようとする隊員を面白がり、ジャージ男は地面を蹴って一気に隊員との距離を詰めようとする。

ライフルを構えて迎撃しようとした残りの隊員は、もう一匹の怪物に横から飛び掛かられ体勢を崩す。

「ヒヒッ！観念しなア！！」

(コイツ等が…闇魔族!!?)

隊員はジャージ男の振り下ろした鉤爪。得体の知れない未知の存在を目の前に死を覚悟し目を閉じた。

しかし、その鉤爪が振り下ろされる事は無かった。

隊員は恐る恐る目を開ける。身体を引き裂こうとしていた鉤爪は振り下ろされず、代わりにジャージ男が腕を抑え苦しむ姿。もう一匹の化け物が肩に風穴を空けて野垂打ち回ってる光景が広がっていた。

「テメエ…邪魔しやがって!!」

ジャージ男は血走った視線を隊員の後方へと向けた。

「…え？」

増援が来たのかと、隊員も振り向いて後方を確認する。しかし、そこにいたのは明らかに大連の者では無かった。右手に銃を構え、漆黒のロングコートを着込んだその男は、楽しそうに口元を吊り上げて笑みを浮かべていた。そして口を開く。

「悪いな…お詫びに俺と遊ぼうぜ？」

4話 まさに噛ませ犬(前書き)

戦闘の描写は難しいです……

#### 4話 まさに囃ませ犬

「おい…増援より先に俺が着くとはどうなってるんだ？」

レイヴンは呆れたような物言いで現状を皮肉る。あのジープは今頃ドライブスルーでハンバーガーでも注文してるのだろうか。

「アンタ…ギルドの助っ人か？」

隊長を介抱していた隊員は、安堵したのか弱々しい声で尋ねる。

「あ？良く分からねえが、其奴はどうした？」

「…ああ、あの男にやられて」

「そうか…その様子なら安心だ。ここは俺に任せて早く病院に連れてけ」

「あ、ああ…わかった！！」

自身は無論ギルドの助っ人とやらでは無い。寧ろギルドとは何だと此方から尋ねたかったが、とりあえず早く連れてけという事は伝わったらしく、隊員は気絶した隊長を、先程片割れの化け物に襲われて軽傷を負った隊員と共に助け起こし裏路地を脱していく。

「テメエ…俺を無視とはイイ度胸だな？」

「ハッ、随分と汚いワンちゃんだな…仕付けて欲しいか？」

レイヴンはジャージ男を挑発する物言いをし、指を手前にクイクイツと動かしてみせる。

「そうかテメエ…死にてえかア！？」

ジャージ男の姿は服を引き裂き変化していく。浅黒い肌をした身体は茶色い毛で覆われていき、まるで狼が二足で立ち上がったような姿を現した。

「やはりライカンか…だが、お前は低級の三下だな」

ライカンとは闇魔族のクリーチャーだ。人狼とも呼ばれており、上位個体なら傷付けた者を同族にして種を増やす厄介な連中だ。しかし、先程の隊長の様子を見る限りでは相手にそこまでの能力は備わっていないようだ。

「そっちはグールか：更に三下だな」

先程肩を撃ち抜いた紫色のクリーチャーへ目を向けたレイヴンは、軽蔑するような眼差しで存在を皮肉る。グールは闇魔族の下っ端であり、言語を操る能力は無い。魂という名の餌を狙って襲い掛かるしか能が無い単細胞である。

「知ったような口を聞きやがって：！！」

ライカンはレイヴンの挑発的な態度に痺れを切らし、再び鋭い爪を立て飛び掛かる。

「ハッ：！！」

振り下ろされた爪をバックステップで回避するも、背後からは既にグールが奇声を上げて迫ろうとしていた。

間髪入れず後ろ腰のホルスターに手を回したレイヴンは、小型懐中電灯サイズのグリップを取り出し左手に構え、スイッチを入れる。

但し、グリップから発生するのは単なる明るい光ではない。高熱を帯びた光の刃である。

「いい感じだ：！！」

武器屋で修理してもらったばかりの愛用武器。`ビームセイバー`は、一メートル程の青く発光した刃を直線状に形成する。

「失せな：！！」

振り向き様に放った横風ぎの斬撃は、グールの胴体を容赦無く溶断し、飛び散る黒い血液すら瞬時に蒸発させた。

「な、なんだってー！！？」

「次はワンちゃんの番だぜ？」

右手に構えた銃。`ビームガン`の銃口が動揺しているライカンの頭部を捉えると、レイヴンは即座にトリガーを引いた。

「クソがッ！！」

腐っても人狼種か。ライカンは持ち前の瞬発力でエネルギー弾を回避し、反撃に転じる。

「あの程度で調子に乗りやがって：！！」

「なんだ、気にしてたのか？」

自身の頭を捻り潰そうと迫るライカンの腕を屈んで回避したレイヴンは、そのままビームセイバーを腹目掛けて突き刺す。

「グアアアアア!!!?」

「ならテメエは挑発に乗るな…動きが単純になるぜ?」

作戦通りとはいえ、単調な戦闘に欠伸が出そうだった。レイヴンはセイバーのスイッチを切り、跪いたライカンの頭部へと銃口を近づける。

「で、日陰でコソコソしてる闇魔族が何で街に現れた?」

「オ、オマエは…オマエは一体なんだア!!!?」

この男は自分達を、闇魔族を知っている。人間の姿に戻ったライカンは、風穴が開いた腹を押さえて恐怖の入り混じった声を上げた。

「質問してんのはこつちだぜワンちゃん?」

レイヴンは銃口を更に強く、グリグリと額へ押し付ける。

「ヒッ、ヒヒ…へへへ…」

「オイオイ…壊れんにはまだ早いだろ?」

口からは涎を垂らし、完全にイッてしまったライカンの姿を哀れんだレイヴンは、ゆっくりとトリガーに指を掛ける。

「ヒヒッ…最期に…っただけ教えてやるぜ…テメエ等は…キヒヒッ…闇魔族には勝てねエ!!!」

「そっかい…あばよ?」

聞いての通り、ライカン曰わく闇魔族には勝てないそうだ。レイヴンはたったそれだけかと呆れ、何の躊躇い無くトリガーを引いて話を終わらせた。

「滅んだかと思っただが…ふっ、面白いじゃねえか」

始末したクリーチャー二匹の死骸は溶けるように床に消えていった。その様を見てレイヴンは笑う。`闇魔族`という馬鹿げた連中の存在を心の底から笑った。

5話 これが大連の実態か!!!? (前書き)

全然ギルド出て来てないやんけ…



## 5話 これが大連の実態か!?!?

静寂を取り戻した裏路地にレイヴンは佇む。

奴等はこのエリアにもいるだろうか。なるべく被害が広がる前に早めに奴等を始末したいところだ。

裏路地を抜けようと歩み出したその時、先程広場の方で見掛けたジープがクラクションを鳴らし、ゴミ箱をひっくり返ししながら慌ただしく侵入してきた。

「ようやくお出ましか…?」

ライフルを構えた隊員達と共に車から降りてきた間抜け面した隊長は、騒がしく声を上げる。

「さあ覚悟しろバケモノ共!」

「悪いが…アンタ等の出番な無いぜ?」

レイヴンは溶けたクリーチャーの跡がシミとなって残った床へ視線を向け、ハッキリと言い放つ。

「そうか…いや良かったよ、少し道路が渋滞しててね?」

「その台詞を負傷した兵士に言っただけやれ」

隊長の舐めた言い訳に皮肉った台詞を返すと、レイヴンは今度こそ裏路地を出ようとする。その時であった。

「お前…ギルドの人間じゃないな?」

背後から声を掛けられ、レイヴンは立ち止まり振り返る。

声の主は銀髪に青い瞳。幼さの残る顔立ちが性別を疑わせるが、それでも自分よりは年下の少年だと伺えた。

「ハッ…どうでもいい事じゃねえか」

「良くないね。ギルド所属以外の人間が奴等を片付けたの?」

そういえば先程もギルドという単語が隊員の口から出てきた事を思い出すも、もうここでの戦闘は終了している。レイヴンは興味を無くし、飄々とした態度で今度こそ立ち去ろうとするが。

「むむっ!この男はギルドの者では無いと!?!?」

隊長はしゃしゃり出るように少年へと確認する。

「今回任務に派遣されたのは僕とアニマだけのはず。本当に何者？」

「そう言うボウズ…お前は？」

人に名を尋ねる時は自分から。これを守らない奴には基本的に素性は明かさないのでレイヴンのポリシーだ。

「エストレア…アイゼンフォート所属のギルドメンバーさ」

「良い名前だな…俺はレイヴン。サンライズタウンから出稼ぎに来た田舎者さ」

「流星」とは随分と輝かしい名前だと素直に誉め、レイヴンは冗談混じりに簡単な自己紹介した。

すると唐突に、そのやり取りを邪魔するかのように隊長が割り込んだ。

「ええい、怪しい奴だ！とりあえず拘束してしまえ！」

全く空気の読めない職権乱用の間抜け野郎だ。先程の態度とは大違いである。愚かな上官の指示に従うしか無い隊員は、ライフルを構えてレイヴンを一斉に包囲した。

「おいコラ…そりゃ無いぜ」

結果として大連を助けたというのに、何とも腑に落ちない気持ちで皮肉な笑みを浮かべたレイヴンは、肩を竦めて仕方なく両手を上げた。

「ボウズ…いや、エストレア。どうにかならないか？」

隊員達に舐め回されるように体中を触られ、武器を含めた所持品全てが没収される中、レイヴンは期待の眼差しをエストレアへと向ける

「悪いけど…僕じゃどうしようもない」

エストレアも今の流れには些か不満があるような表情を浮かべているが、どうやら大連の行いにギルドとやらは干渉出来ないようだ。

加えてレイヴン自体の不信感が拭えていない以上、助けようは無いのだ。

「お触りの次は拘束プレイか？」

電子手錠を詰められた両手を見ながら憎まれ口を叩くレイヴンは隊

員に挟まれる形でジープの後部座席に寄せられ、  
敢え無く御用とな  
った。

## 6話 良くないカンケイ(前書き)

何かゴチャゴチャしてきましたね…？  
後書きには武器の設定を書きました。

## 6話 良くないカンケイ

(帰りてえ…早く終われよ)  
あれから何時間経ったのだろうか。此処は大陸連合軍本部の取り調べ室。

基地自体の規模は本部だけに広いらしいが、拘束されていきなりこの部屋に来たため見物する暇も無かった。

当の取り調べ室は、窓からの僅かな光と電気スタンドだけで照らされているため薄暗く、おまけに狭くて体が圧迫されるような感覚が鬱陶しい最悪の部屋だ。

レイヴンは大連の仕官と机を挟み、現在一対一の取り調べ中である。その割には緊張感の欠片は無く、相変わらず退屈そうに椅子に座っている。

「こ、困ったねえ…そろそろ話してくれないかな？」

「断る…不当逮捕の次は脅迫か？話す事なんざ一つもねえな」

妙にオドオドした態度の仕官に苛ついたレイヴンは、敢えて鋭い目つきで睨み、言葉を返す。

「い、いや…そんな人聞きの悪い」

あからさまにビビる仕官の反応で退屈が潰せそうだと思いついたが、それは直ぐに終わりを告げた。

「その男は釈放だ…出る。もう帰っていいから」

取り調べ室のドアが開く。仕官の一人が外から声を掛けると、部屋を出るようにと首で指示してきた。全くふてぶてしい奴等だ。

「まあいい…やれやれだ」

とりあえず外の空気を吸えるなら何でもいい。レイヴンは椅子から立ち上がると、廊下に出て深く息を吸い込んだ。

「やつほー。お疲れ様っす」

「あ？」

レイヴンは陽気な声に振り向く。取り調べ室の直ぐ隣の部屋から出

てきたその女性は、やけに親しげに話し掛けてきた。

「…誰だ？」

「初めましてレイヴン。私はエイダ。技術部所属の者です」

薄汚れた白衣を身に着け、やけに大きいフレームの丸眼鏡を掛けた姿は如何にも、といった姿だが、印象的な長い髪をリボンで結わえたポニーテールが女性らしさを残してはいる。こんな漫画に出てきそうな奴が実際に存在するのかとレイヴンは率直に感じた。

「冷やかしなら断るぜ？」

まだ名乗っても無いのに自身の名前を知っているという事は、恐らくハーフミラー越しに取り調べ風景を見てたのだろうと推測出来た。直ぐ隣の部屋から出てきたなら殆ど確定的だ。

「そうじゃないです。持ち物を預かってるんで研究室に取りに来て下さい」

「そういう話が…なら、さっさと案内してくれ」

押収された武器類は大事な所有物だ。レイヴンは早急に取り戻すため、エイダに案内を催促させる。

「慌てないで下さい。それから他にも色々と話す事あるんで」

「デートの誘いか？」

「つまんねー冗談です」

そんな雑談を交わしながら二人は、地下研究室へと続くエレベーターへと乗り込んだ。

「コイツはすげえ…まるで工場だな」

地下に下りたレイヴンは、エレベーターの扉が開くと同時に目の前に広がる光景に釘付けとなった。もう少し小規模で地味な研究室があるのかと思いきや、ジープを始めとした乗り物類。今はまだ製造中なのだろうか。二足歩行メカの下半身だけが仁王立ちしており、その周りで作業服姿の男女達が忙しそうに作業をしている。

「因みに私は此処の主任ですよ？」

「オイオイ…冗談はよせ」

エイダの所謂`どや顔`というものにレイヴンは疑いの目を向けながら、冗談混じりに言葉を返す。

「信じてねえって顔っすね？なら私の最高傑作を見せてやるっすよ」  
そう言つて、づかづかと`武装研究室`と表記された部屋へ向かつて歩くエイダに続く形で、レイヴンも半信半疑で着いていく。

「見学が目的じゃねえが…付き合つてやるか」

武装研究室の内部は見慣れない機械のパーツで散らかっており、足元の色取り取りの配線に足が絡まりそうになる。

「先に持ち物を返すっすよ」

エイダはレイヴンの所有物一色が入ったプラスチック性のプレートを取り出して渡す。

「やっぱコイツがねえとな」

レイヴンは手元に戻つてきた武器を満足そうに眺めた。

「その武器は寿命を過ぎてるっすよ？新しいのに替えたらどうっすか？」

恐らく押収された後に調べたのだろう。エイダは書類片手に武器の変更を推めてきた。

「ハッ…俺なりの愛だよ」故郷の武器屋でも同じ台詞を言われた事を思い出し、此方も同じような台詞を返す。

「ナノタイプのフレームに無理やりメガの性能を組み込む…無茶な改造っすね」

「そういう仕様なんだよ。で、最高傑作つてのは何だ？」

ついでに先程見せると言われた最高傑作とやらを見せてもらおうと、レイヴンは辺りを見渡す。

「待つて下せい。今から大尉を呼ぶっす」

そう言つて受話器を手に取つたエイダは、内線ボタンを押してどこかへ電話を掛ける。

「すみませんけど大尉居ます？……え？マジっすか？」

そんな会話が暫く続くと、エイダは受話器を置いて溜め息を吐いた。

「今日は大尉がいないので次回って事でいいっすか？」

「ああ、それで構わねえよ」

その大尉とやらが居ないと駄目なモンなのかと少し興味が湧いたが、その楽しみは次の機会に取っておく事にした。

一方その頃。場所は大陸連合軍本部の最上階。その一室である司令官室。

(くう…何で私がこんな目に)

大陸連合軍所属の大佐。ヒロシは部屋に漂った重苦しい空気に必死に耐えながら、もし可能ならば今すぐ姿を消したいと思った。

「ヒロシ君…今回の任務にアイゼンフォートを同行させた理由は何だね？」

同じく大陸連合軍所属の中将。ビスマルクは険しい表情で窓から地上を見下ろしながら口を開く。

「は、はい…奴等のギルドマスターとは腐れ縁…いえ、め、面識があるので使えるかと」

ヒロシは緊張で上手く喋れず、微かに冷や汗が頬を垂れていくのを感じた。

「困るのだよ…あんな連中に我々の面子を潰されては」

ビスマルクは厳格な態度を崩さないままレジデントチェアに腰掛ける。

「も、申し訳ございません!!」

ヒロシは頭を下げ謝罪する。そして、マスターである野郎の交渉に乗ったのが最期だと心から後悔した。

「本気で謝るならサングラスを取りたまえ…ヒロシ君？」

ビスマルクの指摘にヒロシは顔を触って確かめる。先程から妙に部屋が暗いと思っていたのはこれかと謎が一つ解けたのは良いが、緊張で忘れていたとはいえ余計な失態に顔が青ざめそうになった。

「え、えっ!?! あっ、失礼しました!!!」

「ふん…何がギルドだ」



所詮は便利屋風情だが、中には此方に引き抜きたいと思う奴等も所属している。ビスマルクは何故あんなギルドに人が集まるのか理解出来ず、存在そのものが心底気に入らないと感じるが、今は闇魔族を始めとした大陸の脅威を排除しなければならぬ。あんなギルドでも利用できる間は捨て駒程度に使ってやると考える事にした。

## 6話 良くないカンケイ（後書き）

今回の話にはこんな台詞がありました。

「ナノタイプのフレームに無理やりメガの性能を組み込む…無茶な改造っすね」

ナノとかメガとか説明してなかったので意味分らないと思ったので、この場で簡単に説明します。  
この世界に流通する武器には以下の通りグレードが存在し、それぞれ違った名称で呼ばれています。

ナノ・ウエポン

普通に流通してる武器。初心者から古参まで幅広く扱われている。許可さえあれば誰でも買えちゃう。

メガ・ウエポン

ナノより性能の高い武器。

主に使用出来るのはギルドや軍のエース。民間ではあまり出回っていない。

レア・ウエポン

メガよりも更に高性能で、限定生産された武器的なやつ。民間は疎か、ギルドでも軍でも使用してる者は少ない。

ロスト・ウエポン

とりあえずレア以上の武器。

まだ設定があやふや。

7話 モテる男は辛い(前書き)

そろそろギルドに移行しないとヤバいですね……;  
後書きは大陸連合軍について軽く書きました。

## 7話 モテる男は辛い

空はあつと言う間に夕刻に近づいており、振り向いた際に見上げた本部の高層ビル。そのミラーウィンドウに反射した夕日の光が眩しかった。

「しかし…良いモノを手に入れたな」

色々和不快な出来事もあったが、悪い事だけでは無かった。

あれから地下工場を暫く見学し、成り行きで携帯電話なる物を手に入れたレイヴンは、まだ一件しか登録されていない電話帳を見て咳く。

余っていてどうせ使わない。レイヴン自身の実力を買われ、試作兵器の運用テスターを勤めるという約束でエイダから特別に貰ったものだ。

携帯はコンパクトな折り畳み式で、技術部へと支給されたやつらしい。ネットには繋げず、純粹に通話が目的のものだが、通話料は全て大連が負担してくれるため有り難いサービスと言える。

「さあて…」

アルカディアに着いてから休む暇も無く行動した上に、余計な逮捕の件もあつて予定が狂ってしまった。予定なんて決めてないのだがとりあえず、あれから「アイゼンフォート」とやらが気になっていた事もあり、まずはエイダに聞いた情報通り、「アルカディア」の隣町、「イデア」という土地を目指す事にした。

「君か。小隊の危機を救った者は」

すると突然、正面から待ち伏せしてたように大連の黒い指揮官服を着た男がサングラスを光らせ近づいてくる。

「今度は誰だよ？」

今日はずくづく大連の奴等に縁がある日だ。レイヴンは飽き飽きした態度で受け答える

「私はヒロシ大佐だ。君に是非頼みあつて来た」

「頼み…だと？」

ヒロシは軽く咳払いし、口を開く。

「君が技術部のテスターをやると聞いた。だったらもう軍に所属してしまえ」

「いや、断る」

レイヴンは即答する。大連自体に興味は無く、気に入らない。自身はあくまで技術部に協力する身だからだ。

「……君が技術部のテスターをやると聞いた。だったらもう大連に所属してしまえ」

「おいコラ。何だそのRPGの同じ台詞しか言わない上にYES以外反応しない奴はよ」

「貴様！所属しろ！！」

ヒロシは外したサングラスを地面に叩き付け訴える。そして胸ポケットから再びサングラスを取り出して装着した。

「何で急にキレルんだよ。しかも予備あるのかよ」

このアホな大佐と漫才する時間が勿体無い。レイヴンは呆れて立ち去ろうとするが。

「ハツハ、ヒロシは誘うの下手だな」

ヒロシの背後から現れたその男は、近代的な街にそぐわぬ西洋風の鎧。右手には強固そうな銀のガントレットを着けている。

年齢は五十歳程だろうか。一見無精髭を生やした頼り無さそうなオヤジだが、その出で立ちと力強そうな瞳は闘う者の姿をしていた。

「メタル！今日は貴様のせいで最悪だったぞ！？」

「悪かったって。まあ解決したんだし約束通り酒代のツケは無しな？」

また一人増えた。会話からして二人は顔見知りのようだ。

「アンタは誰なんだ？」

「挨拶が遅れたな。俺はメタル。アイゼンフォートのギルドマスターだ」

「なるほど…あのボウズの上司ってワケだな」

これから目指そうとしていたギルドのマスターを名乗ったメタルにレイヴンは肩を竦めた。何はともあれ、丁度良いタイミングでギルドの責任者に巡り会えた。

「ああ、話は全部聞いたよレイヴン。面倒に巻き込んですまない」「謝るのはアンタじゃねえさ」

例の件に少なからずギルドも関わっている。マスターとして頭を下げて謝罪してきたメタルの姿にレイヴンは謝るべきは大連だと、本部の建物へ視線を向ける。

「それより…俺をギルドに入れてくれないか？」

ついでと言わんばかりに、レイヴンは元々興味があつたのに加え、マスターの人柄にも惹かれ、ギルドへの加入をこの場で決めた。

「おっ、何だギルドに加わってくれるのか？」

「いやいや、ギルドなんかよりは是非とも大連に来てくれ。面接と筆記試験。身体検査を受ければ入れるから!!」

「何だよヒロシ。泥棒猫か？」

「此方が先に誘ったのだぞ!？」

貴重な人材を取られまいと、ヒロシは二人の間に割って入る。元々レイヴンに目を付けてたのは此方であり、寧ろ後から来て横取りする泥棒猫は其方だと反論した。

「レイヴン。ギルドは完全実力主義だから面倒な試験無しで入れるぞ?」

「そいつは話が早くてイイ」

身体検査はともかく、試験と面接なんかで自身を計られるのは気に入らない。既に決まっていた答えだが、今ので尚更固くなった。

「な、何と!?!？」

「ハハツ、悪いなあヒロシ」

メタルは一ミリも悪いと思わず、啞然とするヒロシの肩を軽く叩いて親指を立ててみせた。

「ぐぬぬ…貴重な戦力を得れば中將も喜ぶと思ったのに」

ヒロシは目元を片手で抑え、悔しそうに真の目的を漏らす。

「ヒロシよ…ついでにビスマルクにくたばれって伝えといて」

「誰が伝えるか…！」

ギルドがビスマルク中将に良い印象を持たれて無い事を知っている。しかし、大連側からの評判は気にしてないのであまり関係ない。所詮は僻みでしかないのだから。

「さて…待たせたなレイヴン。これからギルドに案内してやる」

「ああ、頼むぜ」

メタルの手招きにつき、レイヴンは不敵に、尚且つ楽しげな面構えで歩み出すのであった。

「私は諦めん…大連の門はいつでも開けとくからな…！」

「しつげえな…！」

## 7話 モテる男は辛い（後書き）

大陸連合軍について簡単な説明をします。

・大陸連合軍って？

通称「大連」と呼ばれている組織。一部では「犬連」と言われている。都市「アルカディア」に本部を構えており、他の土地にも支部があるらしい。

軍隊と警察が合併してるような恐ろしい組織。

一応大陸の平和のため戦ってるが、話の都合でボコされたりするポジション。今度の活躍に期待である。

因みに徴兵制では無く、試験を受けて入隊するシステム。

伝わってないと思いますが、ナチスをイメージしてます。例えば軍服とか。

・テクノロジーについて

とにかく技術は発達している。話の都合で兵士の武器は今のところ「ヨボい」「ビームライフル」程度しか登場してませんが、本当は結構な装備が運用されてます。エイダが最高傑作とか言ってたのも多分物語に登場すると思います。実はあまり考えてn(r)y



8話 鉄の管へようこそ(前書き)

もう8話なのに…タイトル詐欺か

## 8話 鉄の砦へようこそ

「アイデア」。電車に乗って、アルカディアから約一時間程で到着する町であり、主に商業が盛んな土地だ。あつちの高層ビルが並んだ風景とは打って変わって古いレンガ造りの建物が並んでおり、昼間は客や商人達で賑やかな雰囲気になるらしい。

「暗くなっちまったからな。昼にでも様子を見てくれ」

「ああ。そうするぜ」

二人は会話を交わしながら、同じくレンガで舗装された川沿いの道を歩く。

「何だ。あのボロい建物は？」

レイヴンは目の前に見えた他の建物とは一線を画し、怪しい雰囲気醸し出す謎の建物に対して率直な感想を述べた。

レンガ造りの部分もあるが、壁には所々木材だったり鉄板が打ち付けられており、正面扉の上に設置された看板の文字は蛍光灯が点いたり消えたりを繰り返している。そして、こう表記されていた。

“EISEN FORT”

「マジかよ……」

「そう、このボロい建物こそ、アイゼンフォートだ……！」

「鉄の砦」なんて名前をしているからってつきり要塞のような強固な見た目をイメージしていたが、これでは砲弾は疎か近所のガキが投げたボールが当たっただけで陥落しそうだ。

「もうメンバーは帰宅しちまったかな。まあいい、入ってくれ」

「早速驚きじゃねえか」

ギルドの建物内は割と広く、木製の椅子やテーブルが並べられており、薄汚れた安宿のロビー。或いは酒場を連想させる。しかし、どこか落ち着く雰囲気でもあった。

「ただいま。やっぱり人少ないな」

メタルはギルド内の様子を見て回る。椅子に座って会話に花を咲かせていたギルドのメンバー達はメタルに挨拶しつつ、レイヴンに視線を向けてくる。

「やあマスター。そして君が例の新人君だね？」

すると、カウンター席に座っていた男が振り向き此方へ歩み寄ってきた。

メタルと同じように西洋式の鎧を装備し、首には白いスカーフが巻き付けてある。年齢はレイヴンとあまり変わらないくらいか。ギザッぽい口調に加え、尖った両耳が特徴的だ。

「エルフか…珍しいな」

「ああ、良く言われるよ」

聞いた事がある。本来エルフは人との接触はあまりせず、妖精族の暮らす`アルフヘイム`の森で平和な暮らしを送る種族として知られている事を。

「僕は退屈な森が嫌だね。飛び出してきたってワケさ」

「退屈が嫌いか…面白い」

中々に気が合いそうな奴だとレイヴンは認識し、お互いに握手を交わした。

「…!!?」

握手を交わした瞬間。不意に自身の腕に鳥肌が立つのをアニメは感じた。同時に背筋が凍り付くような嫌な気配を。

「おい、どうした…野郎と握手は嫌か？」

「い、いや…男女関係無しだよ僕は？」

肩を竦めて冗談を口にするレイヴンに、アニメは少々慌てた様子で答え、辺りに視線を向けるが、ふと気配は消えてしまった。気になるが、今のは気のせい。そう考える事にした。

レイヴンが他のギルドメンバーとも握手を交わしている最中、メタルはふと気付く。

「そついや…エストレアは？」

「えっ…ああ、多分恐らく部屋じゃないかな？」

「ギルドは連帯行動が命だというのに…よし、レイヴン。二階に行くぞ！」

ギルドメンバーから携帯に赤外線機能が搭載されていない事を指摘され、仕方無く手動で連絡先を登録する作業をしつつ、レイヴンも二階へと上がる。

「ああ…ちつ、ミスった面倒くせえ」

二階も一階に負けず劣らず薄汚れており、一直線に続く通路の両サイドに扉が幾つか設置されている。同じく何故か落ち着く安宿の雰囲気だ。

「気付いてると思うが、このギルドは旅館を改造して建てたんだぜ？」

「ふっ…やっぱりか」

「メンバーには此処に住む奴もいるんだよ。因みに男ばっかじゃねえぞ？」

「何も期待してねえよ」

「せっかくだから紹介してやるよ」

メタルは扉の前で止まると、少し触れただけで壊れそうな木の扉を数回叩いた。

「返事が無い…居留守だな」

「何故分かるんだ？」

「マスターは何でも分かるのさ…年頃なんだよな彼女も」

察したような表情を浮かべるメタルにレイヴンは率直に思った事を呟く。

「なんかエロいな」

「エロくはないだろ！？」

と、反論するメタル。差し詰め娘に嫌われる親父といったところが。

「エストレアの部屋は此処だ…正確にはアニメと一緒にだがな」

また別の扉の前に立ったメタルは、今度は遠慮無く扉を開ける。

「おい。新人を連れて来たぞ？」

部屋は広くスペースが確保されており、机やベッド。箆笥やソファ  
―等といった生活に必要な物以外は置かれていない、とてもシンプ  
ルな造りとなっていた。

「んー？使える奴なの？」

レイヴンは敢えての自惚れ発言で面白がって答える。

「使えるなんてモンじゃねえ。何せ、俺を欲しがる奴等は沢山いる  
からな」

エストレアは、ふと聞き覚えのある声に本を閉じて視線をその方向  
へ向ける。憎たらしく皮肉た笑みを浮かべた奴。間違いなくあの時  
の男だ。

「お前、逮捕されたハズじゃないのか！？」

「ああ、脱獄したんだよ。また会ったなボウズ」

「くう…マスター。何でコイツを？」

「来る者は拒まず…ってやつだ。仲良くしろよ？」

自身のスカウトもあるが、基本的にレイヴン本人の意志が強い。そ  
れに加え、ギルドはやる気のある者なら未経験者も前科持ちでも何  
でも雇うシステムだ。

「だとよ…しろよ？」

「ふん…」

「よし、レイヴンは今夜この部屋で過ごしてくれ」

「そうさせてもらう。宿無しなんでね」

今晚の寝床。殆ど体一つで飛び出してきたレイヴンは、一番重要な  
事を考えていなかった。

「僕はアニマだけでも我慢してるのに…」

「さり気に傷付くねえ…」

メタルの決めた事には逆らえないのか、或いは拒むつもりが無いの  
かは知らないが、エストレアは軽く愚痴りながら椅子へ腰掛けた。

そして今の一言で、何時の間にも現れたのかアニマが凹む。

「安心しろ。場所は取らねえ…このソファは貰うがな」

肩を竦めて微笑したレイヴンは、フカフカのソファに身を投げて

アピールする。

「よし…レイヴンの面倒はエストレアに任せよう」

「なっ、何で僕がコイツを!?!」

「ハツハ、後輩が欲しい頃かと思ってるな?」

「俺はボウズの玩具じゃねえぞ?」

メタルは子供に玩具をプレゼントするようなノリで、思い付いた事をそのまま口にする。そして、レイヴンの教育係にエストレアを推薦。半強制的に任命させた。

(やっぱり…絶対面白がつて言ってるよマスター)

色々な意味で、敢えて合わないそんな歳の差コンビを組ませる事で面白いものが見られる。大体そんな考えだろうとアニマはメタルの思惑を察した。

「まっ、そんなワケだから今日から俺がルームメイトだ。仲良くしようぜ?」

「僕は…まだ認めない」

「ボウズの許可なんざ要らないだろ?」

「ボウズって言うな!!」

「悪かったな…坊や?」

早速始まった噛み合わないやり取りを見てメタルは上機嫌に笑う。アニマは今後、この三人で過ごす事を考えると先が思いやられる。こうして騒がしく、ギルドで最初に過ごす夜は更けていくのであった。

9話 はじめての1111 (前書き)

戦闘とか全くしてない気がする

## 9話 はじめての1111

ギルドで迎えた最初の朝は、爽やかな気分とは無縁の、容赦無しの枕の投擲で始まった。

頭に直撃した枕を払いのけ、レイヴンは眠そうな目を擦りながらソファから身を起こす。

「朝からダルいな…久々に睡眠ってヤツを楽しんでたのに」  
「永遠に寝かしてもいいよ？」

二撃目の用意もしてたのか、エストレアは手にした枕を何時でも投げられる体制を構え、冷徹に言い放った。

「全く…黙ってりゃ可愛いのによ」

「か、可愛いだと!？」

「おっと。これは失礼」

お返しに動揺させるような事を口にしたレイヴンは、エストレアの慌てた様子に微笑し、ワザとらしく謝ってみせた。

「やあ君達。今日も気持ちの良い朝だねえ」

すると、浴室から出てきた下半身にタオルを巻いた風呂上がりスタイルのアニマは、窓に近づくと勢い良く部屋のカーテンを開ける。空は快晴。朝日の光が部屋に明るく差し込み、外では鳥達がさえざつていた。

「おいコラ…枕投げられた後で野郎の裸を見る朝のどこが気持ち良いんだ？」

華奢で打たれ弱い身体だと言われているエルフだが、アニマのはガチムチ過ぎず、綺麗に引き締まった肉体だった事には正直驚いた。

「は、早く服を着てよ!!」

「皆して冷たいねえ。僕等は同性でしょ？」

露骨に嫌なのか、恥ずかしいのか。エストレアに服を投げつけられ、アニマは器用にそれをキャッチし浴室へと戻っていった。

「よし…お前には今日、ギルドで最初の仕事をしてもらうからね？」



つい昨夜。レイヴンの教育係に半強制的に任命されたエストレアは、やや威圧的な口調で指導者っぷりを発揮する。

「ああ、何でもいいいぜ。何なら他の奴等の仕事を全部片付けてもいい」

「ふっ…余裕でいられるのも今の内だ」

レイヴンの軽口は毎度の事だが、エストレアにはギルドでの仕事を舐めている態度にしか映っていない。

「そいつは面白い」

余裕綽々のレイヴンだが、彼はまだ予想もしていなかった。今まで直面した事もない困難にぶち当たる事を。

ギルドの一階は昨夜と違って賑やかな光景へと変化しており、剣やら銃やら。多種多彩な装備を身に付けた者達がカウンターへと整列していた。

「あれは何やってんだ？」

「皆は掲示板に貼ってある依頼書をカウンターに持って行って、それを受注しているのさ」

「ほう…見してみるよ」

果たして如何様な依頼が来ているのか。レイヴンは掲示板へと移動し、同僚に混ざって確認する。

「盗賊か…」

依頼書の一つに「盗賊討伐」と書かれたものを発見し、肩慣らしに丁度良いと手を伸ばそうとしたその時。

「お前の仕事はそれじゃない。こっちだ」

エストレアはそのままレイヴンのの手首を掴んで引っ張り出し、懐から一枚の依頼書を取り出した。

「オイオイ…何だよソレは？」

レイヴンは依頼書を手に取り、一字一句その内容を確認していく。そして一言。

「おいコラ…犬の世話って何だ？」

「初めて仕事するお前に相応しい仕事だろ？」

思わず依頼書を破り捨てたくなった。突き返そうとするが、エストレアは両手を組んで受け取るうとしない。

「冗談じゃねえ。もっとこう…スリリングなヤツをだな」

犬の世話よりも、先程の盗賊討伐の方がマシだ。振り返ってみると、既に他のギルドメンバーが依頼書片手にカウンターへ向かっている頃だった。

「もう遅い…その依頼はお前の名で受注した後だ」

「なん…だと？」

エストレアのしてやったり顔に、レイヴンの余裕の表情が引きつった。

「破棄は出来ないぞ？依頼者はもう来てる」

「早いな…マジかよ」

気が乗らないが、故郷の「サンライズタウン」でも雑用事は引き受けていた。今はその延長だと考える事にした。

外に出たレイヴン達は、依頼者の子供二人と、今回の防衛目標(?)である犬と対面した。

「今日は家族でアルカディアに出掛けるんだけど、タロウは連れてけないから夕方まで世話をお願いしたいの」

「タロウの昼飯とか、散歩をお願いするぜ!!」

依頼者の少女と少年に詳細の記されたメモを受け取り、内容を閲覧する。餌の種類に散歩コース。そして完全に子供の小遣いレベルの報酬にレイヴンは肩を竦める。

「やれやれ…報酬は1500Gかよ」

「文句を言つな。これも立派な仕事だよ？」

エストレアの策略にハメられ、レイヴンはもう引き下がる事は出来ない。そして、此方を見つめ、今の状況が無邪気に笑ってるようにも見える雑種犬の面に、軽く溜め息を吐いて答えた。

「じゃあねえ…やるしかないんだろ？」

10話 続・はじめてのじじと(前書き)

相変わらず展開は速めに進む

## 10話 続・はじめての1111

イデアの町並みは商人や買い物客で溢れ、確かにメタルの言っていた通り賑やかな風景だ。

「のんびり見物する暇も無しか…ペットなんて飼って何が楽しいんだよ」

犬の首輪にリードを取り付けての散歩。正確には犬が先導する形で散歩させられてるレイヴンは、依頼者を含め、ペットを飼う者の気持ち理解出来なかった。

犬のせいで外出に支障を来され、困ったからギルドに頼む。なら最初から飼うな。完全にペットに飼われてる全地域のペット愛好家を皮肉った。

「ちよ、ちよつと待て！勝手に走るんじゃないやねえ！！」

上機嫌なタロウに引つ張られ、人混みの中を疾走する一人と一匹。苦難はここからスタートする。

その頃、ギルドでは。

「へえ、レイヴンが犬の世話をねえ…何故その依頼を？」

椅子に腰掛け、暇そうに雑誌を捲りながら笑みを浮かべるアニメは、敢えて犬の世話をやらせたメタルの考えを問う。

「奴を再び見極める最初の試練ってやつさ…」

メタルは答える。この依頼は受けた奴の事が良く分かるものだからと。

「なるほど…確かに楽しみかも」

今の説明でアニメも察した。メタルの思惑というものを。

「オイ兄ちゃん！店の壁に何て事してくれんだよ！！」

頑固そうな魚屋のオヤジは、周りを気にする事なく豪快に怒鳴り散らす。

「やったのは俺じゃねえ…洗うから許せ」

レイヴンは耳を押さえながら面倒臭そうに答えた。

(まったく…犬つてのは平気で羞恥プレイしやがる)

何が起きたかは見ての通り。店の壁に聖水を撒き散らしたタロウのお陰で、誰がどう見ても飼い主である自身が後始末をするハメになったのだ。

「後始末は飼い主の責任だ!!」

頑固そうな見た目に似合わず、ブラシと洗剤。水の入ったバケツを持ってきた親切なオヤジに礼をし、レイヴンは虚しい気分で壁を磨く。

「くっ！テメエ……はぁ」

尻尾を振り。相変わらず無邪気な笑みを浮かべてるように見えるタロウの表情に怒る気も失せ、怒りは溜め息と共に排出された。

(とりあえず…飯にするか)

今は丁度昼飯の時間帯。依頼者から受け取ったメモに書かれた餌の種類を確認するが、それが何なのか全く分からない。冷静に考えたら餌代は自腹で、バイトの電車賃のように報酬に含まれてるようだ。

「オッサン。近くにペットの餌売ってる店を知らないか？」

「ああ、生きてる動物屋ならこの道を真っ直ぐだ。後は右側を見てりゃ見つかるだよ」

オヤジの冗談混じりの説明で大体理解し、掃除に使った用具一色を返却して礼を述べたレイヴンは、リードを掴んで再びタロウと共に歩み出す。

犬や猫。鳥や虫や熱帯魚(生きてる魚)。

数多くの生き物が監禁。もとい、陳列されている店。ペットショップへ辿り着いた黒コートの男と、雑種犬の奇妙な組み合わせの一人と一匹は、早速店内へと踏み込む。

「…オマエは幸せか？」

「あろう…お客様？」

籠の中の飛べない青い鳥に話し掛ける姿に、女性店員は少々遠慮がちに、しかし、営業スマイルは崩さずニッコリと話し掛けてきた。「ああ…犬っコ口の餌が欲しいんだ。コイツな？」

種類が不明なので、メモだけ見せてブツを持ってくるように頼んだ。

「まあ、何て汚い犬なのかしら」

ふと後ろでそんな声があった。振り返ってみると、妙に厚化粧。紫色の目立つ服装という気取ったオーラ全開のババアが此方を見ていた。

「バーバラちゃん。ダメよ近づいたら」

抱きかかえてる犬の種別はシーサーだかシーズーだか知らないが、ババアが飼ってるから犬も似たような名前なのかと納得。同時にムカついた。

一方、タロウはバーバラに夢中のようだ。舌を出して尻尾を振り、思い切り興奮してる。

「まったく…発情期か？止めとけ。あの犬はババアに飼われて毒され、名前までババアだぞ？」

タロウの頭を撫でながら、チラリと紫ババアの方へ視線を向けるレイヴン。当の紫ババアは顔を真っ赤にし、レッドババア(?)に進化していた。

「貴様は一体何ぞますかッ!？」

「テメエこそ。他人様の犬を汚い扱いして何様だ？」

ペットショップの店内に一触即発のムードが漂う。

「あ…あの、お客様？」

「あ…？」

頼んだペットフードを持って来た店員は、レイヴンの鋭い視線が突き刺さり、蛇に睨まれた蛙状態となった。

(なんでこうなったの!?)

両者の睨み合いに他の客達も緊迫し、沈黙した店内には動物達の

鳴き声だけが響き渡った。

「お客さん。店内での揉め事は御遠慮願います」

すると、騒ぎを聞きつけたのか、控え室の扉から一人の男が出てきた。

「…マジかよ？」

その男は、格闘技の選手じゃないかと疑うくらいの巨体。或いは酒場の用心棒ですかと言いたくなる、ペットショップの雰囲気似合わせ腕の立ちそうなビジュアルであった。

しかし、レイヴンはこう捉えた。

ペットショップでゴリラを扱ってるなんて聞いた事が無い。おまけに何故、人の言葉を喋ってるんだと。

「店長!!」

店員はそう呼んだ。どうやらあの巨漢は人間で、店長だったようだ。

「文句は野郎に言えよ」

レイヴンは紫ババアへ視線を向け、自身の正当性を主張する、が、喧嘩両成敗。これ以上他の御客に迷惑を掛けるなら腕尽くで排除します」

「上等だ…と、言いたいが。仕方ねえな」

ならば乗ってやる。と、いう考えはフリーの時ならあったかもしれないが、今はギルドに所属し、尚且つ任務中だ。

本当に見た目に反して丁寧な店長に、両者共に睨み合いを止めると、レイヴンはペットフードを買い取り、オマケのフリスビーを貰って店を出た。

「今日は散々ざます！行きますよバーバラ!!」

紫ババアはバーバラを抱き抱ええ、此方をキツと睨むと、足早に去って行った。

犬に話し掛けたって無駄なのに話し掛ける。これは犬を飼ってる奴の典型的なパターンだなと感じた。今の自分もそうなのだが。

去って行くバーバラにタロウは何だか悲しそうな鳴き声を上げる。

そんな気に入ったのかよとツツコミたくなつたが、犬の好みや事情は分からない。

「まあ…オマエに罪はねえよ」

とりあえず慰めに頭を撫でておく事にした。

レイヴン一行は、公園の広場に来ていた。

「さて、飯食うか？」

ベンチに腰掛け、先程買った餌を開封してみた。ドライタイプの餌で、中には骨の形をした、人が食うクリスピーみたいなやつが沢山入っていた。

それを持参した皿に入れ、目の前に差し出すと、タロウは尻尾を振って上機嫌に食べ始めた。

「それ…美味しいのか？」

あんまり美味そうに食べるタロウに、レイヴンも思わず袋から一口摘んで食べてみた。

「………そうでもねえな」

特に味がしない。犬はこれを美味しいというのか。イマイチ理解出来なかった。

ふと向けた視線の先には、確かゴールデン・レトリバーとかいう犬が、飼い主の投げたfrisビーをジャンプでキャッチし、それを銜えて戻ってくるお馴染みの光景が繰り広げられていた。

「面白いじゃねえか」

タロウも犬なら出来る。レイヴンはそう思い視線を向ける。が、食事を終えたタロウは、そのまま芝生に俯せで寝る体制を取ろうとする。

「食ったら寝るのかよ…せつかくだし運動しろよ？」

この広場には他にも沢山の種類の犬が集結している。レイヴンはタロウの体を揺すり、無理やり起こさせる。かなり嫌そうに起きたタロウだが、自分じゃないので、そんな事はお構いなした。

「オマエも犬なら本気出せ。ほら、行くぞー!!」



そう言つて、先程貰つたフリスビーを正面へ投擲するレイヴン。力の入れ具合を間違えて百メートル以上は裕に飛んでいった。

タロウはそれを必死に追い掛けて、いるつもりなのだろうか。投擲速度に追い付かず、加えて恐ろしく鈍足でお互いグダグダになった。「ワオ…やり過ぎたか？」

「ふっふっふっ…貴方も犬も、まるで駄目ですね？」

すると、何やら不快な笑いを浮かべた眼鏡男が近づいてきた。先程のゴールデン・レトリバーの飼い主だ。

「あ…？俺はブリーダーじゃねえよ。っ…か黙ってる」

犬を飼つてる奴等は皆して自分の飼い犬が可愛いと思つてる。だから他の犬を見下しに来るのだろうか。レイヴンは紫ババアの時と同様に、鋭い視線を向ける。

「おお、恐ろしい。私は親切に言っているのですよ？」

「見て、犬飼さんよ！？」

「キヤー！素敵！！」

ワザとらしく言いながら、眼鏡をクいつとさせる仕草が非常にムカつく。そんな優男に黄色い声を上げて近づくと女共もムカついた。どうやら広場の芸能人的なポジらしい。

「私の愛犬。チャツピーの脚元にも及びませんか？」

「ぶっ…ダせえ名前だな」

軽く吹いた。今時チャツピーとはお笑いだ。タロウもアレだが。「ちよつと！犬飼さんに失礼よ！？」

「まあまあ…いいんです。彼には分からない事です」

「犬飼さんつて心が広いのね！！」

女共を宥める眼鏡野郎に、またもや黄色い声上がる。同タイミングでタロウがフリスビーを銜えて、フラフラで戻ってきた。

「もうパワー切れかよ？」

しっかりと戻つて来た根性は評価に値するが、次やったら確実に死ぬレベルだ。

「人と同じで犬にも性格や個性があります。それが理解出来ないよ

うでは駄目ですね」

眼鏡野郎は心底ム力つくが、それは正論でもあった。

「チツ…犬如きで熱くなるのも馬鹿馬鹿しいな」

貴方は場違いですムードにレイヴンは、あくまでクールに対応し、へばったタロウを抱き抱える。

「……悪かったな」

多分、言っても伝わらないと思ったが、レイヴンはタロウの耳元で小さく囁いた。

あつという間に日は傾き、そろそろ約束の夕刻に近づいていた。

その後、広場を出ていったレイヴン達は、暫く町の様子を見て周り、ギルドまでの帰り道を歩いていた。「今日はどうだったよ…？」先程の疲れは何処へやら。途中で水を飲ませたのが良かったのか、タロウは元気を取り戻しており、レイヴンの呼び掛けにクルクル回って反応した。

「楽しかったって事でいいな？」

ひよっとしたら、「二度と一緒に行きたくない」と、という意味かもしれないが、ここは飼い主（仮）の勝手な解釈をする事にした。

すると突然。タロウが動きを止めたかと思つと、鼻をクンクンとさせ始め、落ち着かない様子で辺りを見渡し始めた。

「…どうした？」

レイヴンが声を掛けた途端、タロウは一目散に駆け出した。マナ―違反の放し飼いをしていたため、捕まえる暇も無かった。

「待て、何かあんのか？」

レイヴンも跡を追う。本気を出せば捕まえられそうだが、再び動きを止め、道に鼻を近づけて匂いを嗅いでいる姿は、間違い無く何かを探してるように感じられた。

直線の道を曲がり、タロウが向かった先に聳える建物。町の中心に位置し、このイデアの町の名物と呼ばれてるらしい、オラクル大聖堂。一体あの先に何かがあるというのか。今は獣の嗅覚とやらを

拝見する事にした。

11話 終・はじめてのじごと(前書き)

無理やり戦闘をねじ込んでみた

## 11話 終・はじめての11と

「オラクル大聖堂」。町の名物であり、この歴史的建造物を見るために遠くから観光客が足を運ぶ程の知名度を誇っているらしい。

レイヴンは何かを察知したタロウに着いていき、今、大聖堂の正面扉の前に立っていた。

「随時とデカいな……」

近くで見ると建物の規模はかなり大きく、西洋的なデザインが神聖さみたいなものを感じさせた。

「この中ってか……?」

勢い良く扉を開けて中へ踏み込むレイヴン。建物の中は長椅子が直接的に幾つも並べられており、外から差し込む光が綺麗なステンドグラスを明るく、美しく引き立てていた。

「だ、誰か助けてきます!!」

タロウが部屋の一角に向かって吠え始め、レイヴンも聞き覚えのある声に反応し近づいてみる。

「おやおや……邪魔が入りましたか」

そこにいたのは、愛犬を抱き抱え尻込みしてる紫ババアと、意外にも広場で会ったあの優男だった。

「オイオイ……熟女フェチかよ?」

他人の性癖に干渉する気は無いが、大聖堂で熟女を襲うとはマニアックにも程があると、心の底から軽蔑した。

「侵害ですね……このクソババアを誘って、私とチャッピーの餌にしようと考えただけですよ」

公園で散歩させてた愛犬同士が仲良くなり、飼い主の男女が結ばれる的な流れでも利用したんだなと察したレイヴンは、陰から現れた愛犬チャッピー。だった禍々しいビジュアルの犬。ヘルハウンドを見て微笑。タロウは異形の犬に呻き声を上げて威嚇した。

「なるほど……どの道喰っても不味いんじゃないか?」

ゴールデン・レトリバー特有の美しい毛並みは既に面影すら残さず、赤くて腐ったような皮膚。グールと同じように得体の知れない体液を垂らしていた。

「減らず口を叩けるのも今の内です…!!」

優男の皮膚が裂け、変化し始める。人の皮を被った化け物とは正にこういう奴だ。背中から八本の脚が生え始め、体色は緑色。指は鋭い爪に変化し、怪しい眼光を放つ四つの目玉が此方を睨む。

「ほう…蜘蛛野郎か」

コイツもライカンと同じ三下の闇魔族だ。`アラクネ`と呼ばれ、蜘蛛の能力を持っている。強力な粘着性のある糸で獲物を生きたまま捉えて喰う陰湿な奴である。

「詳しいですね…まあいい。死ねッ!!」

此方の姿に動揺しないレイヴンの態度に、闇魔族に接触するのは初めてではないのかと、つまらなそうに腕から粘着性の糸を放つアラクネ。

「まあな…!!」

屈んで避けるレイヴンだが、アラクネは外れる事を見越していたのか、糸は真後ろにあった長椅子を捉えていた。

「掛かった!!」

そのまま強靱な糸で引つ張られた長椅子を此方へ引き寄せる事で、レイヴンへ直撃させようとする。

「ハッ、面白い使い方じゃねえか!!」

後方へ宙返りし、銃を抜くレイヴン。下級のクセにコイツは楽しみそうだ。先手を取られた腹いせに、照準を野郎へ合わせ、トリガーを引きまくった。

「遅い遅い!!」

長椅子を盾に直撃を避け、その隙に糸をアンカーのように建物の柱に射出したアラクネは、そのまま引つ張られるように移動し張り付いた。

「小賢しいな…」

「ふふっ…それより、私と戦っていて良いのですか？」

アラクネの一言で、レイヴンはふと室内の一角に目をやる。今にもヘルハウンドに喰われそうな紫ババアを、タロウが威嚇して守っていた。

「ああ、普通に忘れてた」

タロウは大事な預かり犬。紫ババアはムカつくが死んでいいレベルではない。レイヴンは銃口を其方に向ける、が。

「やらせませんよ？」

「だろうな…!!」

大概こうなる。粘着性の糸がレイヴンの腕に絡まり、照準とバランスを崩れさせる。

「今です、駄犬ごと喰いなさいチャッピー!!」

「テメエ…!!」

ヘルハウンドは鋭い牙を剥き出しにし、タロウ達に飛び掛かる。もう間に合わないのか。

「お前の仕事への取り組みは赤点レベルだ!!」

ふと叫ぶ声がした。同時に真っ直ぐに飛来してきた剣が、ヘルハウンドの胴体を貫き、壁へと張り付けにした。

「チャッピー!!?!」

アラクネは、剣が突き刺さり悶え苦しむヘルハウンドを見て驚愕する。

「ふっ、遅いぜボウズ!？」

レイヴンは剣の飛来してきた方向へ首を向ける。全体的に白を強調としたダブルレットと、サーコートを身に纏った姿は、登場の仕方と合わさって神々しさすら感じさせた。

もしも、エストレアが来てくれなければ、今頃大変な目に遭っていただろう。飼い主に言い訳出来ない。徐々に冷や冷やした勢いで、動揺したアラクネを逆に此方へ引き寄せる。

「え?えっ!?!」

「ブリーダーでいりゃあ良かったんだよテメエは!!」

先程からやられっぱなしだ。おまけに広場でコイツに説教されたと考えると二倍にムカつく。

「吹っ飛びやがれ!!!」

反撃に、宙に浮いて無防備なアラクネの顔面を、渾身の力でぶん殴ってやった。

「あべし!!!」

アラクネは派手に吹き飛び、柱に叩き付けられ、そのままズルズルと床へ落下した。

「しかし…来てくれるとは思わなかったぞ?」

「ふん…お前が真面目にやってるか見張っていただけさ」

つまり、最初から今まで、レイヴンの行動は全て監視されていた事になる。

「ペットシヨップでの行動は減点対象だね」

「あれはババアが悪い」

さつさと逃げ出したのか。正面扉の方で紫ババアが出て行くのが見えた。タロウは扉の向こうを見つめ、悲しそうな鳴き声を上げる。

「いや、俺がメス犬なら確実に惚れた。安心しろ」

何を安心しろというのか。レイヴンはタロウの頭を撫でて、とりあえず慰めと褒めの一言を口にした。

「多分お前も惚れたな。格好良い登場だったぞ?」

「う、嬉しくない!!!」

エストレアは少々恥ずかしそうに否定すると、先程ヘルハウンドにぶっ刺した剣を壁から抜き取り、アラクネの方へと視線を向ける。

「さて…お楽しみはこれからだな」

トドメを刺しに向かおうとするレイヴン。すると、突然アラクネの姿が優男に戻り、目を覚ます。

「こ、ここは…私は何を?」

「いや、黙れよ」

レイヴンは起き上がるうとした優男に銃口を向け、躊躇い無く引き金を引く。



「グギヤア…!!?」

エネルギー弾が優男の肩に直撃し、仰向けにぶっ倒れる。突然の事にエストレアは驚愕した。生身の人間をレイヴンは平気で撃つたのだから当然だ。

「何て事を…どういっつもりだ!!?」

「だってウザいじゃねえか」

詰め掛けてレイヴンの胸倉を掴むエストレアだが、当の本人は耳をほじるような仕草で面倒そうに対応する。そして。

「操られてました的な演技で油断を誘う奴はウザいだろ?」

「…え?」

エストレアは振り返って優男の方を見る。

「くっ…見抜かれるとはッ!!」

優男の姿は再びアラクネへと変化しており、抑えた肩から溢れ出した緑色の血液が床を濡らしていた。

「普通に分かる。お約束だろ?」

「許さない…貴様等ア!!」

アラクネは怒りと共に、腕から両者へ向け、無数の糸を放出する。「やれやれだ…!!」

レイヴンはタロウを抱えて右へ。エストレアは軽快な身のこなしで左へと回避した。

「下らない…直ぐに片付けるよ!!」

演技だったのなら容赦は要らない。エストレアは腰に装備されている剣を鞘から抜き、二本の剣を構えた。両手にしたのは、`バスターソード`と呼ばれる両刃の長剣だ。偶に、`バスターソード`の間違いだと言う者がいるが、これは刺突型と切斬型。両者の特性を持つ私生児の名を持った混血の剣である。

「はっ…!!」

クロスさせた二本の剣を振り下ろし、アラクネの身体を斬り裂こうとする。が、アラクネは糸を天井へ射出し、巻き上げる事でそれを回避する。

「ひやはっ、当たるものか!!」

「さっさと落ちる害虫」

タロウを安全な場所まで移動させたのもう安心。レイヴンは気兼ねなくトリガーを引き、アラクネを撃ち落とそうとする。

「ひやははっ!!」

まるでターザンの如く。天井や壁に糸を射出させ、悉く攻撃を避けるアラクネ。鬱陶しい限りだ。

「チッ…つまらねえな」

レイヴンは退屈そうに照準を合わせようとするが、ヤツの動きが止まる気配が無い。

「諦める餌風情がッ!!」

隙を見計らい、アラクネが糸を固めた球状のタイプを連続で射出してくる。

「避ける!!」

「分かってるよ!!」

糸の塊は見た目以上に破壊力と重量があり、それらは砲弾の如く両者に襲い掛かる。外れた塊は床を、長椅子を容赦無く破壊していた。

「終わりにするか!？」

壊した分は野郎の命で弁償させれば良い。レイヴンは勢い良く助走を付け、一気に柱を駆け上る。

「お前…!？」

「何だとッ!!?」

エストレアも驚いたが、それ以上にアラクネが驚愕した。

「つまらねえと言っただろ?」

柱を思い切り蹴り、空中で体を捻らせたレイヴンは、そのままアラクネへと一直線へ飛んだ。

牽制に糸の塊が射出されてきたが、それも手にしたビームセイバーを振り、直撃前に全て破壊する。

「ヒィ!お前、まさか!!?」

「お喋りはオシマイだ」

アラクネには先程から引つ掛かっていた事があった。それが何かを言い掛けた所で、レイヴンの無慈悲に振り下ろしたビームセイバーの光刃が迫る。

当たるわけにはいかない。咄嗟に糸を切断し、攻撃を辛うじて避けたアラクネは、地上へと降下する。

「うひゃ！ざまあ！！」

空中に留まれなくなったレイヴンも、共に降下していく。しかし、その表情は笑みを浮かべている。まるでアラクネの行いを嘲笑うかのような。

「ひよ！？」

「終わりにしようか…」

双剣を構えたエストレアは、鋭い視線と刃を向け、アラクネの着地した隙を突いて剣を振り下ろす。

「ひゃッー！！！！」

続いて返し斬り。横風ぎの一閃。数々の怒濤の連撃がアラクネの身体に傷を刻んでいく。

「わ、私が…負け、る？」

多量の出血に行動不能となったアラクネは、ドロドロと身体が溶け始め、静かに息絶えた。

「大した野郎じゃねえな…さて、帰るか？」

欠伸をして乱れた服装を整えたレイヴンは、そのまま何事も無かったかのように立ち去ろうとする。が、エストレアはどこか納得出来ないような表情で問い掛けた。

「お前：何でヤツが芝居をしていた事に気付いた？」

「そんなの…見れば分かるだが」

「説明になつて無い」

「勘だよ勘」

軽く流された気がするが、とりあえず町に被害が出るのは防げた。二人と一匹は、汚された大聖堂を後にし、ギルドへと向かって歩き

出すのであった。

予定より少し遅れて帰還したレイヴン達は、外で待っていたメタルと、タロウの飼い主の子供達に迎えられた。

「タロウ！おかえりー！！」

本当の飼い主達の姿に、タロウは嬉しそうに吠えた。

「ほら、行けよ？」

やはり飼い主の側が一番なのか。少し寂しいと感じる心にレイヴンは皮肉な笑みを浮かべた。

「どうだった？」

「最低の最悪。途中で闇魔族を討伐したのが唯一の救いかな」

エストレアはメタルに自身の仕事ぶりを報告してる。言いたい放題だ。

「タロウの面倒を見てくれてありがとうございます！！」

「ハッ…偶にだったら次回も引き受けてやるよ」

依頼者の少女は、丁寧にお辞儀して礼を述べた。レイヴンも満更でもないといった表情で微笑し、次の依頼も受ける意志を見せた。

「レイヴン。お前は今日の依頼を達成し、何を感じた？」

突然メタルが問い掛けてきた。偶に覗かせる神経な面持ちでだ。

「そうだな…とりあえず疲れた。でも、俺が今日タロウの世話をした事で家族が助かったんなら。別にいいんじゃないやねー。みたいな感じだ」

たとえ周りから見たら些細な依頼でも、実際本人からすれば凄く重要な依頼だつてある。それを解決する事で誰かが助かるならば、自分は幾らでも手を貸す。皮肉や不満は容赦無く口にするが。

「そうか…いや、それだけさ」

メタルはそれ以上何も言わなかった。正しい答えを求めていたわけでは無い。最初から存在しないからだ。上辺だけの言葉に意味は無い。人は皆、自身が正しいと信じた道を突き進めば良い。よってレイヴンの感じだ事も、否定する気は無い。

「次は迷子の猫探しだよ？」

エストレアは新たな依頼書を持ってくる。どうやら近所の飼い猫が行方不明らしい。

「ったく…また動物かよ」

同時刻。アルカディアの大陸連合軍本部の司令官室では、ビスマルク中将与ヒロシ大佐が、何やら話をしていた。

「イデアにも奴等が現れました…」

「それで？」

「ギルドが片付けました。それと、大聖堂に小規模な被害を」

ビスマルクはギルドという単語が出た瞬間に、怪訝そうな表情を浮かべた。

「奴等は増えるだろうな…最悪の場合、アルカディアだけでも死守せねばな」

「は…はっ」

つまり裏を返せば、アルカディアさえ無事なら他の土地はどうなるうと関係無いという事なのか。ヒロシには中将の腹を察する事は出来なかった。

「それと…例のシステム。あれはどうした？」

付け足すように、ビスマルクは会話を続ける。現在技術者が製造している、今後の戦況を変える、大陸連合にとって重要なシステムについてだ。

「あのシステムは…試作品が完全したようですが」

ヒロシは思い出す。近い内に技術主任のエイダが最終チェックを終えた後、実戦導入させる例の兵器の事を。

「そうか…あれが量産されればギルドは必要無いな」

「はい」

どれだけギルドを目の仇にするんだよと、ヒロシは内心ビスマルクヘツツコミを入れたくなったが、立場的問題で頷く事しか出来な

か  
っ  
た。  
。

12話 海賊討伐へ行くようです(前書き)

即興で書いたから短いです

## 12話 海賊討伐へ行くようです

アイゼンフォートの朝は今日も慌ただしい。皆がそれぞれの依頼書を手にし、カウンターに向かつて受注するお馴染みの光景だ。

「何かスリルのある仕事が欲しいんだよな……」

「迷子のインコを捜す仕事があるじゃないか？」

レイヴンは、何か刺激的な仕事はないかと掲示板を眺める。が、腑抜けた依頼ばかりで、面白味が無い。アニマは最近ペット捜索関連の仕事がプロいと定評のレイヴンに、良さげな仕事を薦めた。

「ノンちゃんを探して下さいか……お前、ぶっ飛ばすぞ？」

「僕は評価してるのに」

気に入った仕事じゃないなら働いたら負け。だと、思ってる二人は、今日は無職コース確定。かと思われたが。

「二人共。暇ならこれ行つてこいよ？」

メタルの声に振り向く二人。手にしていたのは一枚の依頼書だった。

「海賊を討伐するだけの簡単なお仕事です……か、面白え」

久々に腕が鳴る。出来れば閻魔族を相手にしたいが、偶には趣向を変えるのも良い。

「貿易商人からの依頼ねえ……大連には頼まないんだ」

「俺達の方が安くて、早くて、安心だからだよ」

アニマはふと疑問に思う。が、メタルの言うその三拍子がギルドの売りだ。それに大連がわざわざ海賊相手に兵を導入するとも思えなかった。

「早速行つて片付けて来い……」

こうして、メタルにグイグイと背中を押された二人は、海賊討伐にへと赴く事になったのであった。

「やれやれ……」

「まだ準備出来てないって……」



港に着いたレイヴン達は、見渡す限りの海の広大さと、潮風の匂いを感じた。

「何で僕まで？」

エストレアは不満そうにレイヴンに視線を向けた。他の依頼が入っていたにも関わらず、部屋にいたとこを、二人に半強制的に連れてこられた。メタルも承知したため断る事が出来ず、今に至ったというわけだ。

「大勢で来た方が楽しいだろ？」

「そうそう。仕事も早く終わるしさ」

「大勢って言えるかな…」

海賊が何人いるかも分からない戦場の大海原に、海水浴にでも行くようなノリのレイヴンとアニマに、先が思いやられるエストレア。暫くして、貿易商人の重役らしき髭オヤジがやって来た。

「皆様がギルドの？」

「そうだ。さつさと仕事に移ろうぜ？」

「たった…三人ですか？」

当然の反応だ。海賊相手に駆り出された人員が三人。おまけにその一人は少年ではないかと驚いた。

「一人で百人倒せばいいだろ？」

「馬鹿…」

レイヴンの相変わらずの減らず口に、エストレアは呟く。

「船は用意出来てるのかい？」

アニマは髭オヤジへ問い掛ける。今回の舞台は海。足場となる船が必要不可欠だ。

「はい。奴等を倒すためなら船もお貸しします」

そう言っつて髭オヤジは、船の停泊している場所まで三人を案内する。

「おいおい…博物館行きのレベルじゃねえか」

用意された船は時代遅れ気味の木製。全長は五十メートル程の大型船。大きなマスト。大砲等の武装は一切積んでいない無防備な船だ。

「ええ。どうせ破棄されるなら今回に役立てようかと」

髭オヤジはそれ以上は語らなかつたが、恐らく、ぶつ壊されても海賊のせいに出来る上、破棄費用も無い。海賊討伐に成功したら尚良い。そんな事を考えているのだろう。

「まあいい。コイツで奴等をおびき寄せりゃいいんだろ？」

「はい。奴等のせいで我々の商売が失敗続きです…懲らしめて下さい」

三人は頷く。出航準備は整った。

「僕等はギルドの名に賭け、必ずこの依頼を成功させよう!!」

アニマは握り拳を前に突き出し、皆もやるように促す。これぞ団結。絆の証。の、つもりなのだが。

「楽しみりゃ何でいい…さっさとやるぜ？」

「ふん…」

浮き足立ってるレイヴンは船へと。興味無さそうなエストレアは軽くスルーした。果たしてこのメンバーで本当に大丈夫なのだろうか。

「えー、やるつよ？」

「そついうのは面倒くせえ」

13話 契約内容は確認しよう(前書き)

あとがきっぽい書いてます

### 13話 契約内容は確認しよう

船を動かす僅かな船員と、三人を乗せた船は、海賊が出没する海域へと近づいていた。波は穏やかで、気候も晴れ晴れとした、安定した航海になりそうだ。

「本当に来るのか？」

「必ず現れます…奴等、船を見れば見境無く襲い掛かるんです」

レイヴンの問い掛けに、望遠鏡で周囲を監視する船員の一人は答える。

「迷惑な話だな。まあいい、出たら軽く片付けてやる」

それまで昼寝でもして待つてようか。そう思った瞬間、突然船が大きな音を立て停止。激しい揺れが襲った。

「どうした!？」

「船底に何か引つ掛かったみたいだ!!」

船は慌ただしくなり、船員達は突然の事態に冷静に対象しようとして動き出す。

「トラブルだねえ」

アニマは船の展望台から、ネットを伝って飛び降りてくる。

「面白くねえよな…退屈だ」

船のトラブルは専門外だ。それは船員達に任せるとしてだ。自分達は早く当の目的を果たしたい。

「ところで二人共。依頼書ちゃんと読んだの？」

今さっきので、エストレアも船内の休憩室から、甲板へと出てきた。そして、すっかり旅行気分の二人へ依頼書を見せる。

「単なる海賊討伐じゃねえかよ…ん？」

字が沢山書いてあって読む気も起きないが、一応目を通してみようとするレイヴン。その時であった。

「びゃあゝあゝゝあうまひいゝいいゝ!!!!!!」

謎の奇声を上げた何者かが、突然海中から飛び出し、甲板へと着

地した。

「……新鮮過ぎるだろ」

そいつは二足歩行の魚。つまり、魚人と呼ばれる種族で、体は鱗で覆われ、手足にはヒレが付いている。手にはカトラスと呼ばれる得物を持ち、その風貌は正に海賊であった。レイヴンは思った。契約内容をしつかり確認しとけば良かったと。

「殺るDEATHYー!!」

「ヴァーぶうー!!」

調子に乗って次々と上がってくる魚人共。ざっと数えて二十匹。いや、二十人と言っべきだろうか。

「まあいいぜ。俺の実力を見せてやるよ」

「いや…僕等の、だろ?」

「全く…行くよ!!」

三人は一斉に武器を構える。楽しい水上ショーが始まる合図だ。

「魚人海賊団`ISONO`に刃向かう奴は容赦しねえ!!」

魚人の一匹が合図すると、後列にいた奴等が一斉に襲い掛かるうとしてくる。

「派手に行くぜ!!」

どの道、依頼者の敵はギルドの敵。レイヴンの構えたビームガンが火を吹き、向かってくる奴等を排除に掛かる。

「うひゃー!!」

「そりゃないよ!？」

被弾した魚人共は御陀仏したが、直ぐに屍を踏みつけて他の魚人が押し寄せる。

「アニマ…!!」

双剣の連撃で、華麗に魚人を斬り伏せるエストレアは、乱戦の最中、アニマの名を呼ぶ。

「おや、僕の出番かい?」

待ってましたと、アニマは手にしたレイピアを、正面の魚人の群れへ構える。そして、切っ先を正面へ向け、手首を動かしくルクル

と回転させ始めた。

「何やってんだあコイツ？」

「構わねえ！殺るぞ！！？」

魚人達は、何をやってるかは分からなかったものの、大きな隙が出来た事に変わりのないアニマを、四方から囲んで片付けようとする。逃げ場は無い最悪の状況にも関わらず、アニマは余裕の笑みで咳く。

「風よ…我を護りたまえ」

不意に大気の流れが乱れる。アニマがレイピアを振り、自身の中から巻き起こされた竜巻は、振り下ろされた得物を弾き返し、逆に傷付ける程の強固さと鋭さを発揮した。

「何だよ…フォース使いだったのかよ？」

レイヴンも大気の乱れを肌で感じ、その発生源であるアニマへ、お前かよと意外そうに視線を向ける。

そもそも「フォース」とは、このアースワールドでは大して珍しくない力だ。種類や才能にもよるが、習得に時間は掛かる。しかし、使えるようになれば、今のように風であったり、炎や雷。自然の力を付与して味方に付ける事が出来る強力な力でもある。

「吹き抜けるトルネード！！」

アニマがレイピアを振る度に旋風が巻き起こり、群がる魚人共を海の底へと突き落としていく。

「つまんねー」

「えー！？」

アニマの活躍に軽く嫉妬したレイヴンは、面白くなさそうにブーイングした。

「死ねッ！！」

余所見してるレイヴンに向け、魚人は後方から手にした三叉のスピアを投擲する。

「あ？」

「危ない！！」

レイヴンは、何かが飛んできてると察知するが、避けるのが面倒なのでダメージくらいは良いかと余裕で構える。が、間に割り込んだエストレアの剣がそれを弾き阻止した。

「あんなの喰らっても大した事ねえよ」

「何馬鹿な事を!？」

「ああ、悪かった、よっ!！」

飄々としたレイヴンの態度にエストレアは反発する。スピアの直撃を喰らって無事でいられるハズでは無いと。しかし、今は議論しても仕方ない。レイヴンは空中に弾かれたスピアをジャンプしてキヤッチ。そのまま投擲し、元の持ち主の心臓目掛けて返却してやった。

「デメエ等…一体何者!？」

たったの三人に押される魚人の群れは、その圧倒的な戦力に一歩二歩と退く。

「僕等かい？僕等は…、アイゼンフォート」のギルドチームさあ!」

「……俺を見るな雑魚共!！」

「はあ…帰りたいよ」

シャキーンと、自分で効果音を言い、荒ぶる鷹のようなポーズをするアニマ。いい恥曝した。レイヴンは面白い奴だとは思ったが、今は同類だと思われなくなかった。エストレアも真面目に戦ってるのが馬鹿らしく感じ、額を手で抑え溜め息を吐く。

「ちくしょう…一旦引き揚げるぞ!！」

馬鹿馬鹿しくも強い。この三人相手には勝ち目が無いと判断し、魚人の一人が全員へ撤退命令を下した。

「逃げんなよ…まだ遊び足りないんだよ!！」

「いいじゃないか。これで奴等も懲りたさ」

「おお…魚人共が逃げてくぞ!！」

一斉に船から飛び降りて逃げていく魚人に対し、容赦無く追撃しようとするレイヴンを、アニマは苦笑して咎める。船内に避難して

いた船員達も、魚人の撤退に歓声を上げて喜ぶ。これで、戦いは終わったのだ。

「これで終わったのかな？」

あっさり過ぎる手応えの無さに、エストレアは呟く。奴等が二度とこの海域で悪事を働く事が無いか。報復行動に出ないだろうか。ともかく、これで本当に最後にしてもらいたいものだ。と切に願う。

あれから数時間が経った。快晴の空は太陽が沈み、満月が浮かぶ漆黒の夜へと変わった。そして、ここは土地の六割が樹木に囲まれている密林の孤島。その松明の光だけが頼りの薄暗い洞窟内で今、魚人の下っ端達が集まっていた。皆、真剣な。或いは怯えた表情で、事のあらましを報告していた。

「と、とにかく奴等、恐ろしく強くて…貿易商人が雇った傭兵に違いありません！」

「畏だつたんですよ…！」

「それで逃げてきたか…馬鹿野郎共がア…！！！」

一人椅子に座り、勢い良く瓶酒を飲み干したその男は、蛸を彷彿とさせる形相。蛸の触手のように髪と髭が生えており、魚人共のリーダー格の証し、船長服を身に着けていた。そして、情けなく帰ってきた部下の不甲斐なさに激怒し、瓶を床に投げ捨てる。

「申し訳ございません、イソノ船長…！」

「そつちで呼ぶな！ジョーンズ船長と呼べ間抜け野郎…！」

イソノ。もとい、ジョーンズは触手を鞭のように動かし、部下の魚人に叩き付け、壁へと吹き飛ばした。

「このままでは済まさないぞ…奴を解き放て…！」

「はっ…！」

この程度では終わらない。ジョーンズ率いる魚人海賊団、ISSO NO`は、まだ諦めなかった。



### 13話 契約内容は確認しよう(後書き)

アニメのフォースは後付けじゃありません。出すタイミングが偶々今回になっただけです。まあ、簡単に言つと魔法ですよ。それから、海賊へのツッコミは無しの方向で。

14話 子供の喧嘩から…(前書き)

海賊は後でやります。今回は性格の悪い男女が戦っただけの内容です

## 14話 子供の喧嘩から…

「終わったぜ…」

「帰ったよっ!!」

レイヴンとアニマ。そして他のギルドメンバー達は肩や腰を抑えながら、アイゼンフォートへと戻って来た。

「っーかよ。引越の手伝いは俺達じゃなくて良くね?」

「仕方ないよ。僕等は便利屋、だろ?」

先日のお魚海賊団撃退の任務に続き、仕事続きの二人は、椅子へと腰掛け一息吐く。今回の依頼は引越の手伝いで、車を運転したり荷物を運んだりで大忙しであった。

「今月は報酬がたんまりだし良いじゃない?」

「ハッ、だな」

これといって欲しい物は無いが、武器の修理費にはなるからレイヴンも、その事には頷いた。

「あらあら。なーんか汗臭いと思ったら、男共が集ってたのねー」

すると、二階へと続く階段から、一人の少女が笑みを浮かべて下りてきた。レイヴンは視線を向ける。其奴の歳はエストレアと近いくらいか。金髪のロールヘアに紫色の瞳。紅いドレスアーマーは凛々しさを演出しつつ、銀の籠手と肩合でが鎧本来の堅牢さを残していた。一番の特徴は、背部に背負った真紅の大鎌だろうか。とりあえず第一声でムカついた事には変わり無い。

「誰だよあのクソガキ?」

率直にアニマに尋ねるレイヴン。ギルドの人間なのか、迷子のガキなのかと。

「駄目だよレイヴン…彼女は怒ると厄介なんだ」

人差し指を唇に当て、小さな事で呟くアニマは、レイヴンに余計な事を言わないように促す。

「ちょっとアニマ。無視は良くないんじゃない？」

「あ、ああ……」

少女はアニマの姿を見ると、面白そうに近いてきた。アニマは嫌な意味でドキツとし、苦笑して身構える。

「おいガキ。此処は託児所じゃねえぞ？」

レイヴンは容赦無く皮肉たっぷりに喰って掛かる。所詮子供相手だが、礼儀を知らない女のガキが一番嫌いなタイプなのだ。

「ふーん。アンタが新人のレイヴン？」

「テメエは何だよ？」

お前こそ何だと、レイヴンは逆に聞く。

「私はマーガレットよ。このギルドの最強候補なんだからね。敬いなさい！！」

ギルドの最強候補。そう自称したマーガレットはビシッと指を指し、どや顔で言い放つ。レイヴンは思わず吹き出した。

「オイオイ皆、聞いたか？ こんなガキが最強だとよ？」

場の空気が凍った。アニマを始め、他のメンバーも恐る恐る席を外す。そして、当のマーガレットは。

「ふっ、ふっ……いいわ」

「あ？」

両者共に不敵な笑みを浮かべ、皆はピリピリとした一触即発の空気を感じる。このままではヤバイ。確実に。

「……教えてあげるわ」

それは、一瞬の出来事だった。マーガレットは笑顔で背中に装備していた大鎌の柄を掴み、振り上げる。発生した衝撃波で椅子もテーブルも、レイヴンごと、壁へと吹き飛ばした。

「ごめんねー。手が滑ってやり過ぎちゃったー！！」

（悪夢再びですかー！！？）

啞然とするアニマ、他ギャラリー達。以前もあんな風に彼女を馬鹿にしたギルドメンバーが居たが、其奴はマーガレットにボコボコにされ、暫く震える夜を過ごしたという。

粉々に破壊された椅子とテーブルの瓦礫に埋まり、レイヴンはどうなったか。下手すれば死。皆が恐る恐る視線を向けると。

「なるほど…大した威力だ」

瓦礫の中から声がする。そして、同時に銃を構えた腕が、マーガレット目掛けて飛び出してきた。数発の容赦ない発砲。エネルギー弾は確実に彼女を捉えていた。

「ッ…!？」

あれを喰らって意識がある。マーガレットは驚きつつ、大鎌を回転させ、弾を掻き消す。

「ごめんよ。間違えて銃が暴発しちゃった」

瓦礫を足で蹴って退かしたレイヴンは、余裕な表情で、皮肉を口にする。

「（（オワタ！））」

ギャラリィ全員が一斉に思った。ギルド内が地獄の戦場に変わると。

「上等じゃない…立場を分からせてあげるわよ!!」

「泣くなよクソガキ？」

ムキになったマーガレットは再び大鎌を構え直す。レイヴンも接近戦に備え、後ろ腰からビームセイバーを取り出し、光刃を形成させ構える。

「お前…どっちが勝つと思う？」

「やっぱマーガレット…いや、新人か？」

いつの間にかギルド内は、どちらが勝つかの予想で盛り上がっていた。最強候補か型破りな新人。期待の眼差しが両者に向けられる中、二人は動き出す。

先制したのはレイヴン。銃の連射で自身の有利な距離を奪おうとする。

「当たったらどうするのさ!？」

「知るか」

幾ら何でもやり過ぎ。アニメはレイヴンに向かって叫ぶ。が、殆

ど無視に近い形で流される。彼なりに手加減はしてるのか。そう思ったが、違うようだ。

「その程度なの…!?!」

エネルギー弾の嵐を突破したマーガレットは宙に飛ぶ。そして、レイヴンの胴体目掛け、大鎌を勢い良く振り下ろす。

此方はビームセイバーで迎え撃つ。光刃は高熱を帯びた刃。対して相手の大鎌は実体の刃。軽く返り討ち、かと思われたが。

「ほう…面白え!!!」

大鎌は光刃に溶断されず、寧ろ押している。もう少し気付くのが遅れたら、体が半分だったかもしれない。光刃と互角に鏝競り合い出来る性能を持つ大鎌は、間違い無く、レアウエポンである。と確信した。

「どうかしら？ 私の『ブラッドローズ』は!?!」

「流石だな。だが、武器の性能は戦力の決定的な差じゃねえんだよ!!!」

武器が強くて本体が弱いんじゃない。仕方ない。そう言ってレイヴンは、光刃の出力をイジリ、刀身を更に肥大化させる。マーガレットはとつさに距離を置き、レイヴンから離れる。

「結局武器じゃん!?!」

「野次馬は黙ってる…!!!」

アニマのツツコミにレイヴンは、思わず銃を発砲しそうになるが、言葉だけに留まった。

「いい加減降参しなさいよ!?!」

その間に、マーガレットは鎌を振り上げ衝撃波を起こす。

「黙れ…!!!」

降参などという生温く生意気な台詞を二度と吐けぬよう、レイヴンも同様に衝撃波を起こし相殺させる。

「無茶苦茶だよ…君は」

何から何までやる事が凄い。ある意味尊敬に値すると、アニマは呆れ顔でレイヴンを見る。

激突した衝撃波は、共に爆風を巻き起こし、ギルドの窓や扉を強制的にオープンさせる。ついでに、ガラスも割った。

「表に出なさいよー!!」

「面白え…!!」

マーガレットは扉から。レイヴンは半壊した窓を突き破り、外へと出る。

「流石に止めないかい？」

「止めたら…死ぬぞ？」

「最期まで見ようよ」

アニマは二人がこれ以上戦えば、確実に町が破壊され兼ねないと、他のメンバーに仲裁するか尋ねる。が、皆はすっかり高見の見物に洒落込んで、止めるのが野暮だと動かない。

「まーたギルドの喧嘩か」

「放っておけ…いつもの事だ」

町民も毎度お馴染みの光景だと、チラツと視線を向けるだけに終わる。

「本気出してんのか!？」

「アンタこそ!!」

二人の振りかざす得物が連続で激突する度に、火花が散り、衝撃が辺りに響き渡る。

「テメエ如きに使う力はねえんだよ!!」

レイヴンは挑発する。最強候補がこの程度じゃギルドの未来が危ういと感じながら、距離を取って銃を連射した。

「少しはやるじゃない…でも、もう終わりね!!」

マーガレットは手を正面へ翳し、目の前から、複雑な模様を描く、円形の魔法陣を出現させる。紅い光を放つ魔法陣は、エネルギー弾を防ぎ、身を守った。

「テメエもフォース使いか」

「そうよ、特別に見せたげる!!」

マーガレットは魔法陣の中心にブラッドローズを突き刺す。次の

瞬間には、光が刃へと吸い込まれるよう消え、炎を纏い始める。

「属性は炎か…」

「灰になれッ…!!」

振るわれた大鎌から炎の刃が三日月状に放たれる。それを見て、尚、余裕な表情のレイヴンは、回避せず、敢えて此方から向かって行く。

「試してやるよッ!!」

見掛け倒しでない事を祈り、最大出力のビームセイバーで炎刃受け止める。

「そんな安い武器で止められるワケないじゃない!!」

レアウエポンから放たれたフォース。勝った後、レイヴンを下部にするため、殺さない程度に加減はしたが、それでもメガ程度の武器では防げるハズが無い。そう思っていたが。

「けっ…期待ハズレか」

レイヴンは呟く。そして、炎刃を防ぎきり、単なる火の粉へ戻してやる。

「うう…あと少しだったのに…!!」

「手加減しやがって…もういいぜ」

「えっ?」

殺す気で来ないマーガレットに萎えたレイヴンは、最大出力を維持し過ぎて悲鳴を上げてるビームセイバーの光刃を解除し、ギルドに戻ろうとする。

「まだ終わってないわよ!?!」

「ああ、俺の中じゃ終わってるから」

「そんなの認めないわ!!」

マーガレットは納得いかない表情でレイヴンを呼び止める。対してレイヴンは、自己完結させて流す。

「これは…どうしたんだ?」

ギルドに入ると、いつの間にかメタルが居た。粉々になった椅子や窓ガラスを見ながら、笑顔でギルドメンバーに事情を聞いて回っ



ていた。

「レイヴンとマーガレットが壊しました…だよね皆さん?」

見て楽しんでたくせに、掌返したようにチクるアニマ。そして一斉に頷くメンバー達。

「ほうほう…なるほど」

当事者の二人に視線を向けるメタル。レイヴンとマーガレットは互いに視線を合わせると、同時に罪を擦り付け合う。

「オッサン。悪いのはクソガキだぜ?」

「私は悪くないわよー!?!」

「言い訳とは…ばつかもーん!?!」

喧嘩両成敗。メタルの鉄拳が、レイヴンのとマーガレットの頭に直撃。二人は頭を押えてしゃがみ込んだ。

「何すんのよー!?!?」

「ひ、響いた…でも、絶対コイツが悪い」

涙目で立ち上がるマーガレット。よるめきながら立ち上がるレイヴン。二人はこの期に及んで言い訳乙な発言をするが。

「どうして先にごめんなさいが言えない!? 喧嘩はいいが、物を壊すのは禁止!?!」

「メタル先生…!」

いつからギルドは学校になったのか。いや、二人が子供だけなのだろうか。アニマは徐々にメタルが怒る姿を見て苦笑した。

「お前達には仕事を与える。二人で行くんだ」

メタルは、物を壊した分の修理費を稼ぐのと、反省を兼ねた依頼を二人に与えた。

「えーん。行きたくないよー!?!」

「うん、駄目だ」

「ちくよつめー!?!」

駄々をこねて抵抗するマーガレットは、メタルに泣きつく。しかし、お情け頂戴作戦は見事に玉砕した。

「アニマ。今日の報酬を貸してくれ」

「うん、無理」

「クソツタレ!!」

レイヴンは今日の引越で得た報酬を、アニメに貸すように求める。しかし、その願いは見事に粉碎された。

「ギルドは団結。連帯行動が命だぞ!!」

メタルは依頼書を二人へ見せる。今回の依頼は、緑の森。ヴェルデ・ヴァルトで行われるハチミツ採取らしい。

「えー、つまんない」

「ブーブー言うな。グレイシアに報告するぞ?」

「嫌ッ、行くからババアには言わないでー!!」

マーガレットは、メタルの一言で急に怯え始め、青ざめた表情で了承する。

「やるしかないんだろ...?」

もう拒否権は無いようだ。どの道、この依頼は決定事項らしい。

「クソガキ...今回だけだぞ?」

「精々足手まといにならないでよね?」

こうして、レイヴンとマーガレット。二人だけの仕事が始まるのであった。

「さーて。面白くなってきた」

(また楽しんでる?)

噛み合わない二人のやり取りを見て、メタルは御満悦だ。また何か考えてるのか。アニメは肩を竦めて微笑した。

15話 ハニートハンター（前書き）

某狩猟ゲームみたいです

## 15話 ハニートンター

緑の森。通称「ヴェルデ・ヴァルト」。緑豊かで目に優しくも、厳しい自然環境である森林地帯だ。自然保護のため一部が管理される土地だが、危険な野生モンスターが多く生息しており、迂闊に踏み込むと死が待っているらしい。

レイヴンとマーガレットは、管理施設が併設してある森への入り口前に来ていた。

「ギルドの皆さん。今回の依頼は最高級ハチミツの採取です。この瓶に詰めて持ってきて下さい。全部持ってきたら報酬を支払いますよ」

依頼者の男は、饒舌な営業トークで説明し始める。そして、容量は大体、五百ミリリットルはある瓶が十本入ったりリュックを取り出した。

「随分と高いハチミツなんだな……」

レイヴンは軽く驚く。報酬は50000Gである事から、瓶一本で5000Gもする代物という事になる。

「キラビーの作る黄金のハチミツは栄養満点の最高級品ですからね」

「なるほどな……オイ、聞いたか？」

虎穴に入らずんば何とかというヤツか。凶暴なキラビーの巣まで行ってハチミツ採取が今回の依頼だ。レイヴンは背後にいるマーガレットに問い掛ける。

「虫……嫌いなのに」

「知るか。さっさと立て」

地面にしゃがみ込み、ぶつくさ不満を呟くマーガレットに、容赦なく立ち上がるように促すレイヴンは、更に言葉を付け足す。

「っーかよ。誰のせいでこうなったか、分かってんのか？」

「お互い様じゃない…それに、虫がいるなんて聞いてないわよー！」

元を辿れば、全てマーガレットが悪い。本来自分が来るべき任務では無いのだ。仕方ないのでエストレアを誘ったが、「行けない」の、一言で同行を拒否され、結局メタルの言う通り、二人で来た。仕事だから割り切ってはいるが、相方がこんな状態じゃ、先が不安だ。

「テメエの頭はファンタジーで腐ってんのか？ ハチミツはどうやって作るのか良く考えてみる」

「知ってるわ。木から抽出するのよー！」

「なるほど…分かったよ」

コイツはハチミツとメープルの違いも分かってない世間知らずの馬鹿という事は分かった。レイヴンはマーガレットの手首を片手で掴み上げ、そのまま引つ張って森の入り口へと向かおうとする。

「それからギルドの皆さん。最近この辺りは密猟者が出没するので見つけたら始末して下さい」

「だ、そうだ。行くぞ？」

「バカ、放してよー！！」

依頼者に呼び止められ、振り向くレイヴン。自分達がやる事もキラビーから見れば半分密猟だが、無許可で狩りをする奴等の方が犯罪だ。抵抗するマーガレットを再度引つ張って、二人は森への第一歩を踏み出すのであった。

その頃ギルドでは…。

「あの二人…大丈夫かな？」

エストレアは、カウンターに散らばった書類を整理しながら、今頃二人はどうしてるのか。ぼんやりと天井を見上げて呟く。

「心配してるのか？」

「ま、まさか…！」

そんな姿にメタルは、からかうように声を掛ける。慌てて、ハッ

と我に返ったエストレアの様子に、アニメも乗った。

「一応仲間として認めてるもんねえ。そりゃあ心配するさ」

「違つて。あいつ等が…ギルドの評判を落とす事をしないかが心配なだけだ」

「なら、着いてけば良かったのに」

今回の依頼は二人の反省のために行かせたものだが、レイヴンの教育者という立場で同行するのは、有りではなかったかと、アニメは口にする。

「そうだけど…僕、マーガレット少し苦手だし」

「そっかー。レイヴンを独占したかったのか。でも今頃二人は…」

「なっ、何だつて言うんだ!？」

「こらこら、その辺にしてやれよ」

ムスツとした表情は照れを隠しているのか。そのままエストレアは一人、席を外した。そんな様子にメタルは、アニメの肩をポンと叩き、続けて言う。

「評判なんかいい。俺はな、二人がどんな様子で戻ってくるか見ただけさ」

そして、舞台は再び「ヴェルデ・ヴァルト」。二人は森の奥深くまで来ていた。最初は舗装された真っ直ぐな道だったが、次第に草木を掻き分けないと進めない面倒な道になってきた。

「お前の鎌で切り開けよ。そういうのに適してるぞ？」

「馬鹿にしないでよー!!」

相変わらずの調子の二人。仕方なくレイヴンが腰の高さ程の雑草を踏み潰し、道を作る。

「つーかよ。お前の他に最強候補っているのか？」

ふと気紛れに尋ねるレイヴン。ギルドの最強候補と呼ばれる者は他にいるのか。興味もあるし、是非一度、手合わせしたいと思っただからだ。

「シユラ姉と…恐ろしいババアがいるわ……」

「へえ…凄そうな女だな」

最後のババアのとこだけ、妙にテンションダウンしたところを見ると、かなり強い女性が二人という事が窺えた。

「俺的にエストレアとアニマが強いと思うが、どうなんだ？」

メタルを除いて、男性の最強候補に二人を挙げたレイヴンは、その辺はどうなのか問い掛ける。

「エストレアは強いし可愛いから好き。アニマは高貴なエルフのイメージと違うから微妙」

「いや、お前の趣向はいい」

ギルド全体から見てどうなのか聞いているのに、自分の好みを答えたマーガレットに肩を竦めてるレイヴン。そんなやり取りをしている間に、目的地が見えてきた。

「見えてきたぞ…キラビーの巣だ」

「うう…じゃあ、早く行って帰ろうよ？」

草場の陰から、目の前の洞窟を見る二人。依頼者から受け取った地図が正しければ、あの洞窟の先に、目的の高級ハチミツがある。

恐怖心からか、早く済まして帰りたいマーガレットは、洞窟に入ろうとするが。

「待て、黙れ」

「えっ!？」 レイヴンはマーガレットの腕を掴み、歩みを止めるように引っ張る。そして、身体で受け止めて口元を塞いだ。

「な、何するの…うっ!?!？」

「羽音がする…奴等だ」

抵抗するマーガレットへ囁くような声で呟き、耳を澄ましながら目を閉じて集中するレイヴン。すると、洞窟の奥から、何やら虫の羽ばたく音が聞こえてきた。

「結構な数だな…」

音は次第に大きくなっていき、遂にその正体を現し始めた。群れを成して現れたキラビー達。体長は50センチ程か。通常の蜂の倍以上はある突然変異種だ。二枚の羽根を動かし自在に飛び回り、

尾に仕込まれた麻痺針で獲物を仕留める。

「うう…虫、やっぱ嫌い…」

「流石に、あのサイズは退くな…だが安心しろ」

キラビーの姿に顔が青ざめていくマーガレットに、同感だとレイヴンも頷く。しかし、これはチャンスなのだ。

依頼者の情報では、キラビーは時間になると群れで狩りに出掛けるため、巣が殆ど留守状態となるらしい。つまり、その間に潜入し、ハチミツを採取すれば依頼は達成される事になる。

「今がチャンスだ…行くぞ？」

レイヴンは奴等の群れが空に消えていくのを見計らい、重たい荷物を背負って草場から飛び出す。

「うう…私、待ってていい？」

「好きにしろ。待ってる間に奴等が来ても知らないがな」

「うう…意地悪!!」

マーガレットはいつの間にか、木の影に隠れていた。レイヴンはそんな姿へ冗談混じりの皮肉を述べると、結局、彼女も一人では居られないのか、渋々レイヴンの後ろから着いていくのであった。



16話 ハニートハンターG (前書き)

狩猟解禁。そして、熊の何とかさん…相変わらず内容はペラッペラ  
だげと始まります

## 16話 八二―ハンターG

洞窟。と、いつても、岩だけがゴロゴロしてる場所ではない。樹木の太い根が行く手を阻むように張り巡らされていて、可能ならば一気に焼き払いたいと思うくらいだった。

「さっさと来いよ？」

鳶に足を引つ掛け、一気に岩場にジャンプして登ったレイヴンは、懸命に鳶を掴んで登ろうとするマーガレットに、早く登ってくるように促す。

「こつという場所は苦手なのー!!」

「苦手とか言つてられねえぞ？」

「だって、何が出るか分からないし…危険じゃない!!」

「何が危険だよ…ほら、掴まれ。そして静かにしろ」

やれやれと、レイヴンはマーガレットに手を差し伸べて、黙るようにと注意した。人は怖いと逆の事をやる生き物だ。よく夜中に心霊スポットに行つて騒ぐ馬鹿な若者に近いものを、マーガレットにも感じた。

「…礼はしないわよ？」

「ハッ、構わねえよ」

素直でないマーガレットに、別に見返りを求めたわけではない、レイヴンは微笑する。そして、そのまま引つ張り出してやる。

「見てみる…例のヤツだ」

「凄い…あれが」

二人は高台から下を覗いた。目の前に広がったのは、ここが洞窟だという事を忘れさせる程に美しく、輝かしい黄金の間であった。池のように溜まった八チミツは甘い匂いを漂わせ、その周りには数匹のキラービーが浮遊していた。

「さて…稼ぎますか」

「でも…アイツ等がいるわよ？」

「さっきの数に比べたらマシだ…行くぞ!？」

そう言って、レイヴンは高台から飛び降りる。着地の物音に反応したキラビー達は、一斉に耳障りな羽音を立て警戒態勢に入った。うう…何やってんのよ馬鹿!！」

「ちっ…早く降りてこいよ!！」

すっかり後込みしているマーガレットに舌打ちし、高台に向かって大声で呼び掛けるレイヴン。その背後からは多数のキラビーが迫っていた。

「悪いな…仕事なんだよ!！」

レイヴンは、とっさにホルスターからビームガンを抜く。そして迫るキラビー達へ向け発砲した。エネルギー弾の命中したキラビーは、身体の脆さ故に四散していく。

「このままアイツに任せちゃおうかな…え？」

一方、マーガレットは、相変わらず高台の陰に隠れてる。上手くいけばレイヴンが片付けてくれるし、楽出来る。しかし、その考えが甘かった。キラビー達はマーガレットにも狙いを定め始める。

集団でうるさい羽音を立て、尾の毒針を剥き出しにして迫ってくる。

「嫌ああああ!!!!!！」

すっかりパニック状態のマーガレットは、刃に炎を纏ったブラッド・ローズを振り回し、応戦する。

「来ないでよー!!!!!！」

「ったく…やれば出来るじゃねえか」

キラビー達は炎を苦手とする。巻き起こる炎の渦に接触し焼き尽くされ、瞬く間に灰と化していった。一応戦ってはいるので、レイヴンも純粹に彼女の働きを認めた。

「コイツで最後か…!？」

喉元目掛けて針を突き刺そうとするキラビーの針を片手で掴み、逆に身動き出来ない状態にしたレイヴンは、恐らく最後の一匹であるうキラビーに、エネルギー弾を近距離で撃ち込んだ。

「ハア…ハア…：…終わった、終わったの？」

「おう、楽しむ暇も無かったがな。さて、始めようぜ」

ものの数分の出来事であった。二人の手によりキラビーは駆逐され、洞窟は静寂を取り戻した。

マーガレットはすっかり脱力した様子で、大鎌を杖代わりに地面に膝を折る。それとは対照的にレイヴンは、片手に残った毒針を投げ捨て、顔や服に付着したキラビーの肉片を払い除けながら、飄々とした態度でハチミツの池へと向かった。「チョロい仕事だぜ全  
く」

瓶を取り出し、中にハチミツを入れてはリュックに詰めていく。

その機械的な作業が暫く続いた。

「オマエも半分は持てよな？」

「重たいのはイヤ」

「…なら護衛しろ」

瓶元々の重量に加え、ハチミツの分が荷物を更に重くした。レイヴンはマーガレットに運搬中の護衛を頼むと、リュックを背負って立ち上がる。

「奴等の相手は嫌よ？」

「…つたく…ワガママな女だ」

「女の子は守られる立場でしょ？」

「都合の悪い時だけ女を主張されるのは嫌いだな」

荷物運びでも護衛でも、結局は反発するマーガレットの態度に、半分呆れ気味のレイヴンは、そのまま元来た道を引き返し、入り口を目指して歩き出した。

「…交代で運ぶのはどうだ？」

「それも嫌」

洞窟を抜け出した二人を、眩しい太陽の光が出迎える。

「後は帰るだけだな…ん？」

「ちよっと、待ちなさいよー！！」

レイヴンはマーガレットへと声を掛けようとするが、彼女からの返事が無い事に気付き、辺りを見渡す。すると、洞窟の奥から彼女が叫びながら走ってくるのが見えた。

「オイオイ…俺より遅いつてなんだよ？」

結局、荷物運びは最初から最後までレイヴンが担当したのだが、それでも遅いマーガレットは相当遅いと、背中の荷物を見せて皮肉った。

「ア、アンタが…早すぎるのよ!!」

「ああ…悪かったよ」

息を切らして反論するマーガレットを軽くあしらうように、レイヴンはワザとらしく平謝りしてみせる。しかし、遊んでいる暇は無い。あまりグズグズしていると、キラビー達が戻ってきてしまう。

二人は再び歩き出そうとする、が。

「何かしら…?」

「ああ…こりやまたデカイ」

突然、二人の目の前に、森林にそぐわぬ派手な黄色の体毛をした熊が、のそのそと、此方に近づいき、道を塞ぐように現れた。

「ええーと。コイツはワイルド・ベア…だよ」

レイヴンも初めて見るモンスターだったため、ガイドブックを片手に冷静に相手の正体を検索する。どうやらこの森で暮らす野生モンスターらしく、ハチミツ大好きな熊らしい。

「チョーカワイイ!!」

「…ちよつと待て!!」

マーガレットは迂闊にも、ワイルド・ベアに近づいて行く。それをレイヴンは止めようとするが、少し遅かった。

「グルルルル…!!」

「え?」

ワイルド・ベアは突然二足で立ち上がると、唸り声を上げ始めた。マーガレットには何が起きたか分からず、そのままワイルド・ベアを見上げる。

「下がれ！ そいつは威嚇してる！！」

レイヴンはマーガレットに向かって叫ぶ。しかし、ワイルド・ベアの剛腕は、無慈悲に振り下ろされる。

「嘘…！？」

間に合わない。マーガレットは鋭い鉤爪が自身の頭を狙って振り下ろされるのを、目を見開いて凝視する事しか出来なかった。

そこに、一発の銃声が響き渡った。

「ったく…世話の掛かる奴だ」

レイヴンの構えたビームガンから放たれたエネルギー弾は、ワイルド・ベアの腕を確実に撃ち抜いていた。

呻き声を上げて後退するワイルド・ベア。その隙にレイヴンは、マーガレットを助け起こしに行く。

「虫は駄目で、何で熊が平気なんだよ？」

「だ、だって…ぬいぐるみで持つてるから…私…」

「……オマエの頭はメルヘンかよ」

コイツはリアル熊とテイディアベアの区別もつかないのか。どうせ、余計な事しないでよー！！」とか言ってくるんだらうなと思っていたのだが、涙目で腕にしがみついてくるマーガレットの姿に調子を狂わされたレイヴンは、やれやれと溜め息を吐いた。

「仕方ない…軽くボコス」

熊というのは臆病だ。殺られる前に殺ってしまえタイプの性格であり、お互い喧嘩を売った以上、もう止められ無い。

狩猟対象でないモンスターを無闇に殺す事は出来ないが、撃退なら問題はない。

「でも…」

「やるしかねえ…立てるか？」

「……うん」

「っかく…しつかりしろ！！」

非常にからかい辛い。レイヴンは辛気くさい雰囲気になれず、マーガレットの背中を叩き、気合いを注入する。

「…痛ッ！！ 何すんのよー！！？」

「よし…それでいい」

マーガレットのワガママも面倒だが、暗いのはもつと面倒だ。少しは元に戻った様子に、レイヴンは漸く戦闘に集中できると安心した。

ワイルド・ベアは雄叫びを上げ、此方に突進してくる。レイヴンも同じく、ビームセイバーを構え突撃する。そして、ワイルド・ベアの手前で飛び上がり、背中を踏み台にして背後に回った。

しかし、ワイルド・ベアも諦めない。ウターンし、巨体に似合わない後ろ脚の跳躍で、レイヴンに飛び掛かる。とっさに回避するレイヴン。体重と剛腕から繰り出された鉤爪は、地面を引き裂き粉碎してしまう。

「コイツ…俺狙いか」

レイヴンは思わずニタツと笑う。ワイルド・ベアは執拗にレイヴンを狙ってくる。先程撃つたのも原因だろうが、勿論、目的は背負っているハチミツだろう。

「面白えじゃねえか…！！」

みなぎってきた。せつかく集めたハチミツを盗られるわけにはいかない。喰うか喰われるかの戦いに、レイヴンは更に笑みを浮かべる。

「私だつてやれる！！」

「…たく…ようやく本気か？」

恐れを無くした瞳で、ブラッド・ローズを構えるマーガレット。ギルドで戦った時と同じか、或いは、それ以上に自信に満ちた良い目をしていた。

振り下ろされた大鎌から衝撃波が放たれ、横から直撃を受けたワイルド・ベアは態勢を崩し吹っ飛んだ。

「こんなの、まだ本気じゃないわ」

「フッ…」

二人は、同じ標的を見据え、互いに背中合わせで武器を構える。

ワイルド・ベアも立ち上がり、再び此方に狙いを定め始めた。

「まだ諦めないってか!？」

「相手になるわ!！」

二人の声に共鳴するかのように、ワイルド・ベアの咆哮が森に響き渡る。大気は震え、驚いた小鳥達は木の陰から空へと羽ばたいていく。狩猟はまだ、始まったばかりだ。

「フーかよ。最初と目的変わっちまったじゃねえか」

「うう…それは言わないで」



## 17話 八丁ハンター2nd(前書き)

調子に乗って2nd。これは部位破壊報酬と捕獲報酬でも狙おうって話ではありません。

## 17話 八二―ハンター2nd

雄叫びと、轟音だけが森に響き渡っていた。その度に、大気が震え、木々や大地が激しく揺れる。

「もらった!！」

マーガレットの振るったブレード・ローズは、ワイルド・ベアの剛腕を捉え、籠手のように堅牢な腕甲に傷を付けた。

「喰らいやがれ!！」

怯むワイルド・ベアへ追い討ちを掛けるように、レイヴンの構えたビームガンからエネルギー弾が放たれる。撃退という目的は一体どうしたか。

「よし…今日はこれくらいで勘弁してやるよ」

出力は気絶用のスタンモードで抑えていたため、死んではいないと思うが、軽く断末魔っぽい悲鳴を上げて倒れたワイルド・ベアは、地面に平伏し、そのまま動かなくなった。

「私に逆らうからよ!！」

「調子乗んな。元はと言えばオマエの責任だぞ？」

「痛っ!？」

得意気に武器をしまうマーガレットに、レイヴンは容赦無く額に手刀を喰らわした。元を辿れば、コイツが余計な事をしたのが始まりなのだ。

「反省してるけど…後悔はしてないわ」

「両方しろよ」

どっかの犯人が言いそうな台詞を口にするマーガレット。レイヴンは額に手刀を再び喰らわした。

「ったく…とにかく目的は達した」

余計な仕事は終わったが、本来の目的はまだ終わってない。レイヴンは背負っていたリュックの位置を調整し、再び歩き出そうとする。が、中で何か嫌な音と良い匂いがし、二人は直ぐに足を止めた。

「やっぱりな…」

レイヴンはゆっくりとリュックを下ろし、中身を覗いた。何が起きたかは単純明解。中身は、ハチミツの甘い匂いと一緒に、瓶の半数が割れてる光景が広がっていた。

「これって…」

「……悪い、ミスった」

レイヴンは皮肉な笑みを浮かべる。どうやら少し動き過ぎたようだ。

「うう…またやり直し…」

「仕方ねえ…来い」

うなだれるマーガレットにレイヴンは声を掛ける。そして、再びハチミツ塗れの甘ったるいリュックを手に持ち、目的地とは違う別の道へと進み出す。

「どうするの？」

「この道を下つてくと川がある…話はそっからだ」

場所は変わり、二人は溪流地帯に辿り着いた。川の流れは緩やかで、水位も足首の辺りにまでしか満たされていない。荷物を下ろしたレイヴンは、割れた瓶と無事な瓶を分け、無事な方に付着したハチミツを溪流の純水で綺麗に洗い流す。

「勿体無い。半分は駄目か…参ったな」

「ど、どうしよう…」

無残に割れた方の瓶を見ながら、レイヴンはあれこれ思索し始める。マーガレットは、ばつが悪そうにレイヴンの様子を窺う。

「仕方ねえ…俺はもう一度取りに行くから、オマエは無事な方を持って先に行け」

やがて立ち上ったレイヴンは、一つの答えに辿り着く。そして、懐から予備の瓶を取り出して見せると、マーガレットに残りの無事な瓶を全て託す事に決めた。

「持ってたんだ…」

「備えあれば何とかつてな」

「道に迷わないか心配…」

マーガレットは残りの瓶を抱えると、帰りが不安な様子で呟いた。

「地図も渡す…大丈夫だ」

「うん…やってみるわ」

今まではレイヴンにくっついて来ただけ。口には出来ないが、自分が迷惑ばかりかけてるのも自覚はある。犯した失敗と失った信頼は、行動でしか取り返せない。マーガレットは、次こそ一人でやり遂げる事を誓った。

「頼んだぞ…クマには近づくな？」

「分かってるわよ」

二人は軽く言葉を交わし、それぞれ反対方向に駆けていく。今度こそ、共に依頼を達成させるために。

その頃、ギルドでは…。

「結局マスターが直すんだよねえ」

「当たり前だ…修理費用が浮くだろ？」

アニマは割れたガラスをテープで補正し、その隣でメタルは、木材をヤスリで削り、椅子やテーブルの材料にしていく。

「それに、言つたる？俺は二人がどんな様子で帰ってくるか見ただけつて」

メタルが日曜大工をすれば無料で終わる事はギルドで常識とされている。しかし、マスターは二人にわざわざ修理費用を稼がせに行かせた。今回も何を考えているのか分からない。何も考えてないかもしれない。とりあえず、アニマは一言だけ言つた。

「マスターは悪趣味だねえ」

「悪趣味じゃ、痛ッ！！？」

「やれやれ…ちゃんと帰つてくるかな」

メタルは言い返そうとする。が、余所見した瞬間、釘を打とうとした金槌が指に直撃し悶える。アニマは溜め息混じりに呟き、作業

を再開し始めた。

そして、再び舞台はヴェルデ・ヴァルトの洞窟。キラビー達を殲滅させていたため、大丈夫だと思っていたが、それがいけなかった。

「泣けるぜ……」

マーガレットと別行動で正解だった。レイヴンは陰から顔を出して覗く。輝かしいハチミツの間を埋め尽くす程の、キラビーの群れ。どうやら入れ違いで、狩りに出掛けた奴等が戻ってきていたようだ。（奴等…怒ってんのか？）

正確には分からないが、キラビーの仲間がうるさい羽音を立てながら仲間の残骸を運んでいるのを見て、かなり気が立っているように窺えた。しかし、奴等が再び狩りに出るまで待つには時間が掛かる。と、どうか待ちたくない。

「ハッ…やる事は一つ!!」

頭の悪い行動程、単純な話はない。レイヴンは陰から飛び出し、構えたビームガンからエネルギー弾を発射。気配に気付いたキラビーは、最初の犠牲となった。

「再び悪い…仕事なんでな」

一方、マーガレットは順調に帰りの道を進んでいた。つい先程、キラビーの群れが巢の方へ向かったのが見えたが、果たしてレイヴンは無事か。それが気掛かりだ。

（でも…アイツなら平気だよな）

しかし、今は残りのハチミツを届けるのが先だ。レイヴンは虫も平気だし、何とかなる。向こうが信じてくれたように、此方も信じるしかない。

「よし…終わった!!」

「いやあ…こんな大物が楽に手に入るなんてな」

すると、突然、森の奥から男達の高笑いが聞こえ、マーガレット

は恐る恐る近づき、木の陰に隠れて様子を窺った。

(あいつら…)

五人組の男達は、網に引つ掛かって身動きの取れないワイルド・ベアを囲み、猟銃を構えていた。あの風貌は、恐らく噂の密猟者だろつ。

「しっかし。最初から弱つてたから楽に進んだな!!」

最初から弱つていたとは何か。よく見ると、ワイルド・ベアの腕甲に斬撃の跡が残っていた。マーガレットは思い当たる節がある。絶対あの時に付けた傷跡だ。

(ここはやるしか…!!)

ワイルド・ベアが捕まったのには自分に責任がある。それに、密猟者を野放しには出来ない。マーガレットは勇気を振り絞り、木の陰から密猟者の前に姿を現した。

「そこまでよアンタ達!!」

「だ、誰だ!？」

突然の声に、密猟者の男達は驚き猟銃を構える。が、その正体が少女だと分かると、直ぐに銃を下ろし、一同、一斉に笑い始めた。

「何だ子供か」

「驚かせやがってよお」

「他の場所で遊んでろ」

密猟者は真剣に取り合わない。そして、マーガレットを無視し、ワイルド・ベアを檻付きのトラックに運ぼうとする。

「無視するな!っ!!」

「うるせえんだよガキ!!」

大声を上げて怒鳴るマーガレットに、密猟者の一人は手にした猟銃を空に向けて発砲。威嚇射撃で追っ払おうとする。

「……へえ」

「失せるガキが」

同じガキ扱い扱いでも、レイヴンに言われた時とは違う怒りが込み上げてきた。体は震え始めたが、これは恐怖ではない。マーガレ

ツトはゆつくりと背部のブラッド・ローズに手を伸ばす。

「武器だと!? 生意気なガキめ!!」

「仕方ねえ…始末するぞ!!」

マーガレットが武器に手を伸ばすと、密猟者は皆一斉に猟銃を構える。密猟を見られたからには、証拠隠滅を図るしかない。それが例え子供だとしてもだ。

「それはどっちかしら?」

しかし、マーガレットの不敵な笑みに密猟者達は、次の瞬間まで、相手を子供と見た事を後悔する事になる。

猟銃のトリガーが引かれるよりも早く、衝撃波が密猟者の一人をノーバウンドで吹っ飛ばし、木に叩き付ける。

「なっ!!!?」

啞然とする密猟者達。慌ててマーガレットに狙いを定めようと猟銃を構えるも、彼女の姿は既に視界から消えていた。

「余所見してる暇あるワケ?」

「ハッ…!?!」

男は息を呑む。背後から声がするまで、気配を全く感じ取れなかった。そして、無慈悲に振るわれた大鎌によって猟銃は無惨に切断され、ついでに髪の毛も綺麗にカットされてしまった。

「クソガキめ!!」

距離を取り、マーガレットの背後に立った密猟者は、猟銃を構え、容赦なく散弾を放つ。逃げ場を失わせるように拡散した鉛は、マーガレットの身体を捉えた。ハズであった。

「何それシヨボっ」

鉛は彼女の身体に直撃する寸前で、溶けるように消滅してしまった。当の本人も、何事も無かったかのように、退屈そうに佇んでいた。「なにッ!?!」

一体何が起きたのか。目を凝らして確認してみると、彼女の身体から僅かに揺らめく炎が発生しているのが見えた。

「ば、化け物か!?!」

男は続けて猟銃を発砲するが、灼熱の炎は身を護る鎧となり、拡散した鉛をことごとく打ち消していく。

大鎌を引きずり、笑顔で近付いてくるマーガレットに、男は一步步退く。その笑顔の裏には、この森林を焼き尽くす勢いで、激しく燃え盛る炎が垣間見えた。

「ごめんねー。私は虫が嫌いだけど、アンタ達はもっと嫌いだから」



18話 ハニートハンター2ndG(前書き)

こんなラストで大丈夫か？

## 18話 八二一ハンター2ndG

「全く…退屈だぜ」

エネルギー弾の直撃を受け、四散するキラビー達。肉片が雨のように降り注ぐ中、レイヴンは欠伸が出そうな程の単純作業を皮肉った。

「諦めてハチミツを採集させやがれ…ん？」

すると突然、洞窟の天井の方から、耳障りな羽音が聴こえ始め、レイヴンは其方に視線を向ける。まるでヘリコプターでも近付いてくるような、今までとは比べ物にならない程の音が次第に大きくなり、此方に近付いてきてる事が分かる。

「へえ…」

その音の正体は、天井の穴から飛び出し姿を現した。体長は通常のキラビーの三倍以上はあり、その巨体を支える大きな羽を動かしながら姿を現す。

「女王の登場か…」

「クインビー」。キラビー達を統率する司令塔だ。しかし、その風貌は女王と呼ぶには相応しくない、害虫が巨大化しただけのグロさしかなかった。

クインビーが剥き出しにした尾の針は、レイヴンに向けられる。

そして、先端から毒液が垂れ流された、自身の身長程の規模がある針を、銃弾の如く射出してきた。

「ハッ…!!」

蜂は針を刺したら死ぬ。なんて昆虫図鑑の常識は通用しない。レイヴンは身を翻して毒針を回避する。後方の岩に突き刺さった毒針には、強力な酸が仕込まれているらしく、臭いだけでもヤバそうな煙を漂わせた。

しかし、回避に成功したのも束の間。クインビーは仲間のキラビー達を特攻させ、レイヴンを再び狙い始める。

「同じ事だ……!!」

レイヴンはシューティングゲームの要領で、ビームガンを連射し、向かってくるキラービー達を駆逐していく。が、ここで問題が発生した。

(ちとキツいか…)

ふと、ビームガンのエネルギー残量のメーターに目をやるレイヴン。残り40パーセントという、何とも半端な数値。あまり長期戦になると此方が不利だ。しかし、クインビーはそんな事お構いなしと、その巨体を活かし突撃してくる。

「コイツの出番か!!」

武器は一つでは無い。チヨロチヨロ動く奴には有効とは言えないが、ここはビームセイバーで接近戦を仕掛ける事にした。

クインビーは突進と同時に、再び生えてきた毒針をレイヴンに突き刺そうとする。

「甘いな……!!」

レイヴンは敢えて此方から接近。そして、直撃寸前のところでスライディングし、擦れ違い様にビームセイバーを振り上げ毒針を破壊してやる。同時に尾の部位も傷付けた。

「〜」

ギリギリのカウンター。そしてスリルが、身体中を熱くさせる。興奮のあまり、思わず口笛を吹いた。しかし、クインビーは怯まない。再び毒針を再生させ、その大きな羽を動かして上昇し始める。

「チツ…面倒くせえ」

クインビーは意外とタフな奴だ。だが、見た感じ、尾以外の部位は脆そうだ。特に頭や羽。手足辺りは狙い目だ。

レイヴンは地面を強く蹴って飛び上がる。そして、クインビーの頭部を狙い、逆手に構えたビームセイバーを突き刺そうとする。が、突然クインビーの尾から、液体が勢い良く吹き出した。

「……ッ……!!?」

レイヴンは正面から液体を直に浴び、地面に落下してしまう。

着ていた衣類。そして露出していた皮膚に付着した液体は、鼻を刺すような刺激臭と共に、煙を上げる。

「まったく…漏らしやがって。この服と武器は気に入ってたのによ」  
液体を浴びた皮膚には、火傷で爛れたような痕、そして痛みが駆け巡る。しかし、そんな状況にもかかわらず、レイヴンは余裕な表情で、所々穴の空いたロングコートと、火花を上げてお釈迦になったビームセイバーを気にする。

キラビー達はレイヴンが倒れないと分かると、更に攻撃の手を強める。四方八方から、剥き出しにした針を向け、レイヴンの身体中を容赦なく突き刺す。

「ぐツ!? テメエ等調子に乗るなって、オイコラ聞けツ!!!」

まさに隙を突かれ、激しい猛攻に遭うレイヴン。体内に注入された猛毒によって身体中が痺れ、激しい痛みが襲う。

(クツ…遊び過ぎたか……)

レイヴンは暫く抵抗したが、やがて地面に膝を折ると、そのまま倒れてしまう。輝かしい黄金の間は、彼の身体中から流れ落ちた、鉄臭い鮮血に染め上げられてしまった。

(手荒な針治療だ…仕方ねえ)

別に誰かが言ったワケでも無く、レイヴンは自分に言い聞かせる。ここで死ぬ運命ではないと。

激しい爆発音が、森に響き渡った。地面はミサイルが着弾したかのように抉れ、トラックは破壊され、煙を上げて炎上。その周囲には、密猟者達の無惨な屍が転がっていた。

炎に焼かれた大地。その光景は、この世の物とは思えない程であった。頑張れば、煉獄、なんてタイトルが似合いそうな、愉快で素敵な地獄絵図が書けそうだ。

「もう終わったのー?」

「あ、悪魔…悪魔だ…」

密猟者の男は、炎の中に佇むマーガレットの姿に一切の希望を失

い、恐怖を抱きながら気絶した。正確には彼等は死んでいないのだが、殆ど殺されたようなものだ。

暫くすると、騒ぎを聞きつけたのか、森の管理者達がノコノコとやって来た。後は彼等に身柄を引き渡せば大丈夫だろう。

「ちよつと…いや、かなりやり過ぎです!!」

「本当だわー。酷い事するのねアイツ等」

ハチミツの依頼者は、目の前に広がる光景に驚愕し、直ぐに仲間に消化活動に移るように命ずる。一方、マーガレットは己自身の行いだと、自覚していない様子で辺りを見渡した。

「森林火災になったらどうするんですか…まあ、お手柄です。それで例の物は？」

とりあえず密猟者が捕まえられたので、依頼者は溜め息を吐きながら、目的のハチミツについて尋ねた。

「勿論。半分はレイヴンが持つてくれば完璧よ!!」

自信満々な表情で、マーガレットは木の陰に隠しておいたハチミツへ目をやる。これで今日は、密猟者を依頼という大義名分の下ボコせた上に、依頼も達成出来た最高の日となる。ハズであったが。

「……あれ？ 無い、無い、無いのツ!!?」

マーガレットは目を疑った。近くまで行って、何度も目を擦って確認するが、隠しておいたハチミツの瓶が見つからない。戦闘で吹っ飛んだのだろうか。涙で滲んだ目で辺りを探そうとすると。

「あれ…じゃないですか？」

依頼者の男は、遠くの方を指差す。マーガレットも立ち上がり、其方に視線を向ける。

「ぐぬぬ…オマエカーツ!!」

戦闘の最中、抜け出したのだろう。視線の先には、ワイルド・ベアが瓶詰めされたハチミツを美味しそうに頬張っている姿が映っていた。

「あれでは報酬は渡せませんね…」

「まだよ…レイヴンが帰ってきてない!!」

依頼者の男は、融通の利かなそうな饒舌営業トークで言う。確かにワールド・ベアを傷付けた分を考えれば、あれはあれで良いかもしれない。しかし、依頼が達成出来なければ意味が無い。マーガレットはムキになって答える。レイヴンが帰ってくれば、まだ望みはあると。

「俺が何だつて？」

その直後、ふと後方から声がした。

「えっ、レイヴン！？ どうしたのその体！！？」

衣類が穴だらけのボロボロ姿で登場したレイヴンに、マーガレットは驚きの声を上げた。

「ああ、奴等に刺された」

飄々と答えるレイヴン。所々刺された痕は見えるが、特に目立つた傷は見当たらない。殆ど無傷だ。

「刺されたって…身体は何ともないの！？」

「つたく、細かい事はいいだろ…ブツは手に入れたぞ？」

随分と簡単に言ってくれるレイヴンに、マーガレットは疑問をぶつける。キラビーに刺されたら、解毒剤でも無い限り死に至る。

しかし、レイヴンは答えない。はぐらかすようにマーガレットの肩を叩いて言うと、懐から瓶を取り出し、依頼者の男へと渡す。

「これ…だけですか？」

依頼者の男は、目を丸くして言う。レイヴンが取り出したのは一瓶。依頼された数には程遠いものであった。

「そつだ。何か文句あんのかよ？」

「ありますよ。真面目にやって下さい」

「やったよ。ならオマエが行けばいいじゃねえか」

半ば聞き直って答えるレイヴン。それを言ったら元も子もない話だ。

「密猟者を捕まえたのは良いですが、依頼が達成されてない以上、

報酬はマイナスです」

依頼者の男は、相変わらず営業トークで、電卓片手に計算し始める。そして。

「森を焼いたのもマイナスして…10000Gです」

計算は終了した。元の報酬から大きく差し引かれ、貧乏学生の約二日分のバイト代レベルにまで値下がりしてしまった。

「……ああ、分かった」

「…あつ、待つてよ」

腑に落ちないように表情を浮かべ、レイヴンは何か言い掛けたが、そのまま黙って報酬を受け取った。そして、もう此処に用は無いと、一言だけ残して立ち去る。マーガレットも同様、その後ろから着いていった。

二人はイデアに向かう汽車に乗って、ヴェルデ・ヴァルトの地を後にした。

車両には全く人が乗っていない。四人掛けの席に二人だけという貸切の状態だ。

レイヴンはボーっとした様子で、何を考えているのか、ひたすら沈む夕日を車窓から眺めていた。

その夕焼けに照らされた哀愁感漂う横顔に、マーガレットは不覚にも見とれてしまった。そして、何故だか胸の鼓動が早くなっている事に気付く。

「…何だよ？」

視線を感じたのか、レイヴンはチラリと視線だけをマーガレットに向け言う。

「なっ、何でもないわー!!」

「…そうかよ」

互いに目が合うと、マーガレットは慌てた様子で視線を逸らした。そんな姿をレイヴンは流し目で暫く見つめたが、やがて、特に気にする事も無く、再び外の景色を眺め始めた。

そして、再び車内が沈黙に包まれる。やがてマーガレットは、ス

ローペースな列車に揺られ、次第にうとうとし始めきた。今日一日で色々な事があった。それら全てを振り返りながら、眠りかけた頭で練った言葉を口にする。

「ねえ…私が居なければ、依頼は成功したかな…？」

「…何だよいきなり。もう昔の事だ…素直に失敗したって言えばいいじゃねえか」

やけに似合わない後ろ向きな発言に、レイヴンは面倒くさそうに目を細め、言葉を返す。

「みんなに笑われちゃうよ…」

「かもな…でも、頑張ったお前を笑う奴がいるなら、俺はそいつを許さないぜ？」

「え…？」

眠り掛ける頭では、何を言われたのか上手く聞き取れなかったが、少し嬉しい事を言われた気がした。

「二度も言わせんな…寝ろ」

「……………うん」

聞き返そうとすると、レイヴンは微かに笑いながら、面倒くさそうに呟く。しかし、それは憎たらしい笑みでは無い、どこか優しいな表情。意外性を感じながら、マーガレットは静かに目を閉じた。



18話 ハニートハンター2ndG(後書き)

大丈夫じゃない、問題だ

19話 最強候補が酷い件（前書き）

まあ…不定期ですから…、

## 19話 最強候補が酷い件

あれから数時間後。イデアに到着したレイヴンは、眠っているマーガレットを負ぶってギルドへの道程を歩んでいた。

「まったく…面倒くせえ」

此方を見ながら擦れ違う町民達の視線が妙に恥ずかしく、レイヴンは一刻も早くギルドに帰りたいと感じた。

何故こうなったかの経緯は簡単。レイヴンは汽車が駅に到着した際に、寝ている彼女を起こそうとするも、全く起きてくれず、仕方なく負ぶってきた。と、いうわけである。

「子守かよ……あ？」

そんな事お構い無しにと、すやすや眠るマーガレットに、溜め息混じりに呟くレイヴン。すると、不意に目の前から歩いてきた女性と視線が合う。その女性は此方を見ると、足を止め、話し掛けきた。

「君が…噂の新人だな？」

「………だったら？」

「警戒するな。私はグレイシア…君と同じ、ギルドメンバーだ」

同じギルドメンバーを自称するその女性は、蒼を強調した東洋の衣を、露出度の高い、割と現代風に仕立て直したのもの身に纏っており、黒髪の長髪と大人びた顔立ちから、自分より年配だと伺えた。

「へえ…こいつは驚きだな」

レイヴンはこの女性が、ギルドの人間だという事に素で驚いた。

最初はてっきり、水商売の女が誘ってきたのかと思っただからだ。

「マーガレットと一緒に仕事をしたがる男はいないのだが…君は見所がありそうだ」

「仕方ねえから組んだだけだ…世話の掛かる奴だよ」

レイヴンは頷いた。それは今回組んで良く分かった。確かに強い奴かもしれない。だが、性格に問題がありまくる。大人しくすれば、まだ普通なのだが。

「……………レイヴン？」

二人の話し声で起きたのか、マーガレットは目を覚ます。仄かに暖かい背中。それがレイヴンのものだ、寝起きの頭では暫く分かんなかった。

「やつと起きたか。オマエなあ……」

此処まで運んできた事を軽く愚痴つてやろうかと思いきや、先手を取られるように、マーガレットから発せられた台詞はというと。

「ちよつと！！ 恥ずかしいから早く下ろしてよー！！」

ある意味彼女らしい台詞。しかし、ムカついた。

「はあ？ 寝言は寝て言え。つーか言われなくても下ろしてやるよ」  
そう言つて、レイヴンは屈まずに、彼女を支えていた両腕を素早く放し、そのまま地上へと落としてやった。

「きゃっ！？ 痛つたーい、何すんのよー！！？」

「早く下ろしたんだよ。文句ねえだろ」

マーガレットはケツから面白く落下し、涙声で訴えてくる。そんな彼女を、レイヴンは軽くあしらった。もう彼女の扱いは心得てある。

「起きたかマーガレット。貴様、ギルドの備品を破壊したそうだな？」

騒がしくやり取りする二人の後ろから、グレイシアは、凍てつくような、静かな口調で声を発した。

「そ、その声はッ……！？」

声の主の姿を見ただけで、マーガレットは一瞬、頭の中が真っ白。そして、喉が干上がった。

「貴様：ギルドの最強候補としての自覚が無いな。永久に眠る覚悟があるのか？」

（何で…どうしてババアが！！？）

続けて冷徹な言葉を放つグレイシアに、マーガレットは涙目で腰を抜かした。これは悪夢なのか。もしそうならば、早く覚まして欲しいと切に願った。

「何だよオマエ…随分と弱気じゃねえか？」

まるでキラビーに襲われた時と同じか、それ以上に恐れた様子のマーガレットに、レイヴンは鼻で笑って皮肉る。

「何言ってるのよ…グレイシアはギルドの最強候補なのよ！！？」

「ああ…って事は、オマエ、の言ってたババアの方か」

ふと、レイヴンは思い出す。ギルドの最強候補である女性は三人その内の二人は誰なのか気になっていたとのだが、たった今、名前と顔が一致し、グレイシアがババアと呼ばれてる人物だと判明した。そして、悪びれた様子も無く、オマエの部分を強調して、マーガレットに視線を向けてやる。

「ほう…貴様、やはり永久の眠りに着きたいようだな？」

「えっ、えーと…私そんな事言ってるよー！！？」

余計な事を。と、反論する間も無く、視線だけで突き殺せそうなグレイシアの鋭い目が、マーガレットを捉えた。当の本人は誤魔化し方が下手くそ過ぎる。完全に嘘だと、表情にも口調にも現れていた。

「まあいい…まずはギルドに戻るぞ。話はそれからだ」

「ハッ、そうだな」

ここで長々と立ち話をして仕方がない。グレイシアは、続きはギルドで行う事を決めると、プルプル震えながら身構えるマーガレットを放置して、レイヴンと共に歩き出す。

「……あつ、待ってよー！！」

「彼女等が帰ってくるね…」

ギルドの一階。カウンター部屋で、アニマはふと席を立ち、正面玄関へ目を向ける。

「本当に…？」

「姿は見えなくても、強力な気が立ち込めてくるからね」

エストリアは読んでいた本のページに付箋を挟んで閉じると、同じように玄関を見て、確かかと問う。

フォーヌ使いが無意識に垂れ流しているチカラを感じる事。フォーヌ使いなら感覚さえ掴んでしまえば造作も無い事のだが、古来から自然と共に暮らしていたエルフ。その出身であるアニマは、特にその感覚が研ぎすまされている。

「よっ、ただいま。そして最初に言っとく。依頼失敗した。」  
最初に入ってきたのはレイヴン。二人を見て、発した第一声がこれである。

「ふん：全く。信用問題に発展するよ」

その割には、普段通りの飄々とした態度に、エストレアはどこか安堵した。が、やはり同時にムカついた。

「私も帰ったぞ。マスターはどこにいる？」

「やはり君かあ。今呼んでくるよ」

二番目に入ってきたのはグレイシア。アニマは、やはり先程感じたチカラの主が彼女だったかと頷くと、メタルを呼ぶため、二階へ続く階段へと駆け上がった。

「最悪……あつ、今日はエストレアがいるのねー!!」

「うあ、来た：出て来た」

何かに絶望したような暗い表情で、フラフラと玄関から入ってきたマーガレットは、エストレアの姿を見るや否や、途端に鬱陶しい程の笑顔を取り戻した。

露骨に嫌がるエストレアは、近づく彼女を避けようと、数歩後退りし、距離を置こうとする。が、やがて、壁の行き止まりまで追い詰められてしまう。

「ふっふっふっ……もう逃げられないわよ」

「くっ……!!」

揉み解すような、いやらしい手つきで迫ってくるマーガレットに、露骨に拒否反応を示すエストレア。もう終了かと思われたが、救済の手は、直ぐに差し伸べられた。

「貴様：まだ話は終わってないぞ」

背後から迫ったグレイシアは、マーガレットの首根っ子を鷲掴み

すると、そのまま手前に引つ張り出す。

「ひぎイ！？ イヤ、イヤッ！！　どうか命だけはッ……！！！！」  
「殺しはしない……これは授業だ。貴様の体にみっちりと教育してやる」

そう言つて、近くに置いてあつた木の棒を構えたグレイシアは、マーガレットの尻をドレスアーマー越しに何度も何度も叩き始めた。  
「痛い……痛いッ……！」

悲痛な声を上げ、彼女は逃げながら耐える事で抵抗を続けたが、グレイシアは執拗に追跡し尻を集中攻撃する。

「そうだ、踊れ！！　そして、豚のような悲鳴を上げる！！」  
やがて、マーガレットは糸の切れた人形のように大人しくなり、遂に床に平伏した。

「勝手にへばるな……だらしのない奴め。立て。そして私を楽しませろ」  
グレイシアは容赦なく立つように指示する。が、もう声も届いていないのだろうか、ボロ雑巾のように打ち捨てられた彼女の虚ろな瞳からは、光が失われていた。

「ふふつ、やはり生意気な娘を滅茶苦茶にするのは最高の気分だな……」  
「……恐ろしいよッ……！！」

目の前で起きた半陵辱行為に、エストレアとレイヴンは、息ピツタリのツツコミを同時に入れた。

「ツ……かよ……さつきとキャラ違くない？」  
「彼女はスイッチが入ると危険なんだ……特にマーガレット相手には容赦ないよ」

レイヴンは小声で呟く。所謂、サディストという類だろうか。第一印象が水商売の女だったとはいえ、少しはマシな女かと思つたが、今のでイメージはボロボロと崩壊していった。

エストレアも小声で補足説明する。助かつたとはいえ、何だか逆に可哀想に思える程であつた。

「みんな帰つて来たか……って、グレイシア。またマーガレットをイ

ジメたのか？」

「ああ… 備品を壊した罰。と、いう大義名分だな」

二階から降りてきたメタルは、床に平伏したマーガレットを見て、やれやれと溜め息混じりに言う。対してグレイシアは、叩き足りないそうに手にした木の棒を弄びながら、さらつと本音を口にした。

「少し羨ましいね…」

さり気アニメマが、何かほざいた気がしたが、そこはスルーした。  
「オイ… 生きてんのか？」

散々蹂躪された挙げ句、放置されてしまったマーガレットに、レイヴンは軽く咳払いしてから、静かに声を掛けた。

「悔しい… あんなババアに… 私… 汚されちゃった」

「ああ… 悔しいのか」

マーガレットは無表情、且つ、弱々しく自身の無力さを嘆いた。

正直、着いていけないレイヴンにとっては意味が分からない流れだったが。

「でも… 感じちゃ… う、ワケないでしょ…!?!？」

「まあ… 感じたら負けだからな」

再び、弱々しく言葉を発するマーガレットだが、やがて光を失ったはずの瞳には炎が宿り、一気に体を起こして復活を果たした。

そんな彼女に、レイヴンは案外元気だった事に驚きながらも、冷静にツツコンでやった。

「起きたか… さあ、続きだ」

「ハイハイ… そこまでだ」

スイッチの入ったグレイシアを制止させ、メタルは部屋の中心へと移動する。

「さて、二人共。帰ってきたばかりで悪いが… 皆にも話がある」

「まあ… いいぜ。何だ？」

依頼の失敗に関しては触れられず、お咎め無しかよと肩を竦めるレイヴン。別にして欲しかったワケでは無いが。

「以前の海賊討伐だが… どうやら奴等がまた近海で暴れてるらしい。



それで、その海賊。再び俺達ギルドで討伐する事が決定した」

案の定。メタルは懐から一枚の契約書を取り出して説明し始める。聞いている通り、どうやら例の魚共が、また調子に乗り始めたらしい。

「オイオイ…それは本当かい？」

「ハッ、あの生臭い奴等な」

「まだ懲りてないのか…」

以前の当事者である三人は、口を揃えて言う。

「とりあえず、詳しい話は後日だ。今日は解散な…ああ、眠い眠い」  
メタルはそれだけ言い終わると、眠そうな目を擦りながら再び二階に戻っていった。

「ハッ、退屈しなくて済みそうだ…暇潰しにはなる」

「全く…遊びじゃないんだぞ？ オマエは気持ちが良い」

奴等の悪行は厄介だが、依頼が舞い込んでくる以上、退屈はしない。レイヴンは遠足感覚で楽しむ事にした。

そんなレイヴンに、ジト目で視線を向けたエストレアは、軽い気持ちで望まれては困ると、釘を刺すような物言いで指摘する。

レイヴンはニヤリと笑い、

「相変わらず厳しいな…まっ、オマエのそういふところも嫌いじゃねえぜ？」

パチンと指を鳴らして、軽い調子で流すように答えてみせた。

「あっ…って、誤魔化すな!!」

不覚にも一瞬だけ動揺してしまっただが、直ぐに冷静さを取り戻すと、階段を駆け上っていくレイヴンを追うように、エストレアも続いた。

「マスターも消えた…さあ、夜はこれからだぞ？」

「もう止めて…これ以上されたら…壊れちゃう…」

グレイシアはメタルが引っ込んだと同時に、再びスイッチをオンにする。

恐怖という名の媚薬に狂わされてしまった彼女の身体は、今宵も終わらぬ恥辱に開発されていくのだろう。

「羨ましいねえ……」

なんていう、卑しい想像を一人で繰り返して、暇人のアニメだったのだ。

20話 氷結のババ…術者（前書き）

海賊ネタを絞る前に、色々やりたかった事を…後悔はしていない。

## 20話 氷結のババ…術者

毎度のように、依頼を持ち込む者や、求めたりする者で賑わうギルド。

混み合っている一階とは別に、レイヴン達は例の海賊討伐に備え、自室で待機していた。

「暇だな…早く海賊ぶっ飛ばしに行きたいぜ」

「仕方ないだろ？ 依頼者が来なければ始められない」

レイヴンは退屈そうにソファァーで寝そべり、ビームガンを壁に向けながら、発砲する仕草を試みせる。

そんなレイヴンへ、エストレアはバスタードソードの手入れをしながら、溜め息混じりに答えた。

「そうそう。それまで、しっかり準備して休んでおくべきだよ」

朝シャン後なのか、アニマは上半身裸で浴室から出てくる。言ってる事はもっともだが、やはり朝から野郎の裸は嬉しくも何ともない。

「オマエって露出狂なの？」

「失礼だなあ…」

「見られて嬉しいのか？」

「嫌いではないよ」

「変態かよ」

「僕は紳士だよ」

「変態という名のか」

「二人共…うるさいよ」

こんな具合に、他愛も無い会話のやり取りが暫く続いた。

が、しかし。レイヴンの退屈はこの程度では紛れるワケがなかった。

何を思い立ったのか、突然ソファァーから飛び起きると、予め密林サイトで注文しておいた、同じ黒の新品ロングコートを羽織って扉

へと向かっていく。

「どこに行く？」

エストレアは、何をやらかすつもりなのかと、怪訝そうに尋ねる。  
「体を動かかしに行く……」

レイヴンはそれだけ言うと、振り返る事もせず部屋を後にしている。  
「さてと……グレイシア探しに行くか」

廊下に出たレイヴンは、まずは受付のある一階へと降りていく。  
同僚や依頼人で占領された部屋の中から、彼女の姿は無いかと探っている。

「見えないでしょ!!! ときなさいよー!!!」

何やら耳にキンキン響く、騒がしい声が聞こえてきた。

「何やってんだアイツ……馬鹿か？」

マーガレットは依頼掲示板を観たがっているようだが、同じ目で周りを同僚が埋め尽くしているため、背の低い彼女は思うように観る事が出来ない。

オマケに騒がしいため、彼女の声も彼等には聞こえていない。

「もう……!!!」

「よお、暇か？」

諦めたマーガレットは、頬を膨らませながら、そのまま立ち去ろうとする。が、不意にレイヴンと視線が合い、ピタリと歩みを止めた。

「何よ……暇だったら？」

「グレイシアの居場所が知りてえ」

やや不機嫌そうなマーガレットだが、レイヴンは構い無しに話を進める。

「ババアなら……裏庭じゃないの？」

「分かった。行ってくる」

「……何か用なの？」

「用って…奴と戦うに決まってるんだろが」

「あつそ……えっ!!?」

何当たり前の事を言わせてんの。と、言わんばかりに、さらりと答えてみせるレイヴン。

驚いてるマーガレットを尻目に、レイヴンは裏口を目指して歩み出した。

と、いうワケで。レイヴンはグレイシアと戦いたいようです。

ギルドの裏庭は部屋の外からは見えるが、実際出たのは初めてだ。土の地面に、軽く雑草が生えてるだけの場所で、あまり広いとは言えないが、子供がサッカーで遊ぶ分には十分なスペースではある。その中心に、グレイシアは佇んでいた。

「よお…暇か?」

「暇だな。因みに要件は言わなくて良いぞ?」

レイヴンは背後から声を掛ける。振り向いた彼女は、腕を組んで、まるでRPGのボスキャラを連想させるような雰囲気醸し出していた。

「戦いたいのだろ? そんな顔をしている」

「ほう…話が早くて助かるな」

(どどど…どうしよう!!)

両者余裕の笑みを浮かべの対峙。扉の陰から両者を見つめるマーガレットは、気付いたら凄い展開になっている事に、軽く着いていなかった。

しかし、同時に良い事を考えた。グレイシアはギルド最強候補。レイヴンは認めたく無いが実力がある。つまり、新人のレイヴンが最強候補のババアに勝てれば。

(面白い事になるわ!!)

マーガレットは口元を釣り上げて笑みを浮かべる。因みに自分と戦った時の事はノーカウントだ。

「さあ…始めるか」

「そうだな…死なない程度に相手してやろう」

グレイシアは、背中に装備された杖に手を伸ばし、片手で掴んで構える。

見た目は氷のように半透明な、美しいフォルムだ。先端部の雪の結晶のような形をした部分は、恐らく刃だろう。杖というよりは、槍に近い形状をしていた。

「やはり氷のフォースか。どうりで冷たいと思ったぜ」

対して、ビームガンを構えたレイヴンは、先程から。或いはもつと前。この裏庭に出た瞬間から、妙にひんやりとした空気の流れに違和感を感じいたためか、相手の使用するフォースの属性を見破った。

「察しが良いな。だが…その程度で勝てるのか？」

グレイシアは、杖の設置点で地面を叩く。すると、次の瞬間、地面から発生した鋭い氷の柱が、レイヴン目掛けて一直線に猛進していった。

レイヴンは氷の柱を、ビームガンで破壊しようと試みる。が、ビームが命中した側から、新しく形成されていく氷によって、此方が圧されてしまう。

「ちっ…!？」

それを、直撃寸前のところで回避。体の横を駆け抜けていく氷の柱から発生した冷気が、此方にも伝わってくる。

「この魔杖、氷天華、は、私のフォースの威力を更に引き上げる…こいつの前では、君は無力だ」

「ハッ、言ってな」

ブラッドローズのように、特殊な性能を誇るレアウェポンに対し、此方はカスタムした安いビームガンだ。しかし、これで負けが決まるワケでは無い。

出力を気絶用のスタンモードに調整すると。レイヴンは躊躇い無くトリガーを引き、グレイシアを狙って発砲した。

「甘い…」

対して、グレイシアの行った行動は実にシンプルだ。掌を前に翳し、氷で形成した六角形の盾を造り出した。

しかも、それだけでは無い。盾に命中したビームは、まるで鏡に反射した光のように、レイヴンに狙いを変え、同じ弾速で放たれた。

「なっ…!？」

「氷鏡ノ盾」に、科学の光など効かぬな」

どうという原理かは知らないが、今は考えている暇が無い。最初のビーム弾は頬を掠った。が、二発目以降は全て、身体に直撃し、激しい痺れと共に後方へと吹き飛ばされてしまった。

「ちっ…喰らったか」

「いい運動になる。まだ起きるのか？」

「同感だ。やるに決まってるんだろ」

吹き飛ばされたレイヴンの様を見て、得意気な表情を浮かべるグレイシア。レイヴンも、今がスタンモードで無かったら、色々大変だったかと、首を鳴らしながら戦闘継続の意志を見せた。

「何かと思えば…オマエは何をやっているんだ!？」

「君ってば…相変わらず命知らずだねえ」

ふと、エストレアとアニマ。二人の声が二階の方から聞こえてきた。

見上げてみると、そこは丁度自分の部屋。外の騒ぎに、二人も気付いたのだろう。

「体を動かしてんだよ」

「馬鹿を言うな!！」

下手したら明日の依頼に支障が出る。エストレアは、ルームメイトとして、レイヴンを放置したのが失敗だったと、心から後悔した。

「おお…やってるぞ!！」

「みんな来いよ!！」

周囲には、いつの間にかギルドメンバー達が見物に集まっていた。中には、レイヴンかグレイシア。どちらが勝つかの賭けを始める者



もいた。

(ふふふっ…ババアが負ければ最高だわ!!)

ギャラリーを集めた張本人。マーガレットは不敵に笑う。

公衆の面前でババアが滅茶苦茶にされ、悔しそうな表情で喘ぐ姿を想像しただけで鼻血。もとい、笑いが止まらない。

「やれやれ…遊んでいたただけだというのに。落ち着かな」

「面白え。魅せてやらねえとな!!」

グレイシアは、人が集まった事を良くは思わなかったが、レイヴンは逆に燃えてきた。彼にとってはボクシングと同じ、スポーツと何ら変わらないのだ。

(こんな時にセイバーがあればな…)

とはいえ。頼りの接近武器「ビームセイバー」は、先日の依頼の時にぶっ壊され、修理も終わってない。だからと言って、射撃だけで倒せる相手でも無い。

(どうする…何でも良いから何か)

次の行動を思案しつつ、チラリとギャラリーの方へ視線を向けるレイヴン。もう少しマシに戦える何か。それを探るために。

「オイ、それ貸せ」

「えっ…?」

そこで、レイヴンが目を付けたのは、ギャラリーの中に混じっていたマーガレット。の、装備している「ブラッドローズ」だ。

「拒否権はねえ…ぞ!!」

立ち上がったレイヴンは、宙へ高く飛び上がり、マーガレットの背後に回る。

「ちよつと…!?!?」

戸惑う彼女から、半分奪い取る形で武器を拝借したレイヴンは、そのまま大鎌を構えて、元いた場所へ戻っていく。

「マーガレット。貴様…武器を渡したという事は、私に対する反逆と見なす」

「そんなの酷いわ!!」

グレイシアは威圧的、且つ凍てつくような口調で言う。

確かに酷い。が、そういう大義名分でイジメられるし、どの道イジめるので、正直、武器がレイヴンの手に渡ったところで、特に気にはしなかった。

「ブラッドローズ」を掴んだレイヴンは、ビームセイバーとは違う、手に馴染まない得物に、違和感を覚えた。

「なるほど…面白い」

マーガレットは、この大鎌を軽々振り回していたが、実際に構えてみると結構重たい。

実用的で、メンテの楽なシンプルな武器が理想のレイヴンにとっては、こんな草狩り用の道具をデカくしただけの武器は手に余る。だが、偶にならこういうデカブツも良い。

「炎のレアウエポンなら倒せると？」

「多分な…!!」

グレイシアの余裕な態度を見た限り、お決まりの、氷属性は炎属性に弱い、RPG的なパターンは通用しなそうだ。

それでも、試す価値はある。フォース使いは、その力を武器に付与して戦う事が出来る。

しかし、彼女の「氷天華」のように、最初から武器そのものに属性が付与されてる場合は、別に所有者がフォースを会得してる必要は無いのだ。

「おっ…出来た」

「嘘っ!?!」

大鎌の刀身に炎が宿る。ダメ元でやったレイヴンも驚いたが、それ以上に驚いたのは、持ち主のマーガレットだ。

所有者がフォース使いである必要は無い。しかし、所有者でなければ、武器の持つ特殊効果は使えない。

それを、今手に持ったばかりのレイヴンが発現させたのには、常識的に考えて納得がいかない。

「どつやっつたのよー!?!」

「さあな…どうでもいい!!」

とにかく、これで戦える。三日月状に放たれた炎の刃は、真つ直ぐにグレイシアを捉えた。

「ふふっ…」

それでもグレイシアは、少しも慌てる素振りを見せず、腕を正面に向ける。

その瞬間。再び地面から飛び出すように出現した氷の柱が、炎の刃を打ち消すと、次は此方反撃と、宙に手を翳す。

しかし、何も起こらない。と、思いきや、レイヴンの直ぐ真上からは、無数の氷柱針が雨のように、容赦なく降り注いできた。

「殺る気が…?」

レイヴンは軽く皮肉る。が、それくらいの気持ちで来てくれた方が、此方も楽しい。

本来ならビームガンで撃ち落とすが、今の武器では使い勝手が悪い。

降り注ぐ氷柱針を、無謀にも正面へと踏み込む事で回避したレイヴンは、そのままブラッドローズを構え、グレイシアへと突撃していく。

「避けてみるよ…!!」

再び刀身に宿った灼熱の炎が、火の粉を散らし、辺りを明るく照らし始める。

「うおまぶしっ!!」

ギャラリー達の注目も集まる。果たして、これで勝負が決まるのか。

「アイツ…」

「恐ろしい対決だねえ」

止めに行こうとしていたハズが。気が付いたら、エストレアもアニマも、つい両者の戦いに魅入ってしまった。

愉快そうな笑みを浮かべ大鎌を振るうレイヴンの姿は、まるで魂を刈り取りに来た、無慈悲な死神を彷彿とさせる。

「必要ない…来い!!」

最早、避ける必要は無い。とつさに氷天華を正面に翳したグレイシアは、瞬時に複雑な模様を描いた、青い魔法陣を展開させる。

振り下ろされた大鎌は、魔法陣に防がれ。周囲へ、赤と青の眩い光を散らす。

「部屋を明るくしないと倒れるぞ!!」

「今は外だから問題ない!!」

ギャラリー達も、目がチカチカする中、決定的瞬間を見逃すまいと目を凝らす。

「ちっ…負けるかよ。力を貸しやがれ!!」

魔法陣如きに防がれて終わるワケにはいかない。レイヴンは、炎の勢いを更に高めようと、大鎌を強く握って念じる。

「…これは!？」

グレイシアは、思わずハッと息を呑んだ。

武器の持ち主でないレイヴンが、ブラッドローズの炎属性を発動させた事はまだ良い。フォースの使い手から見れば、今の炎は、脆弱なマツチの火同然の出力だし、発動は単なる偶然だったのかも知れないからだ。

しかし、更に威力を上げてくるなんて業は、全く予測出来なかった。

刀身から逆噴出された炎が、ブースターのような役割を果たし、魔法陣を強行突破しようと迫り来る。

「あんな使い方…でも、勝てそう!!」

マーガレットも、フォース使いでもないレイヴンのクセに、炎の勢いが急に増した事。自分の武器が他人に振り回される光景に、何とも複雑な心境だが、グレイシアが敗北するフラグにニヤニヤが止まらない。

「灰になれッ!!」

「くっ…!!」

限界を超えた魔法陣が破られると共に、戦場と化した裏庭に、爆

風が巻き起こる。

爆風に吹っ飛ばされたギャラリー達が、最後に見えた場面は、レイヴンの振り下ろした大鎌が、グレイシアの体を捉えていたところ。幸い炎が建物に燃え移る事は無かったが、荒れてる学校並みに、何枚かガラスが割れた。

殺されはしていないだろうが、果たして勝敗は。煙が晴れたその時、戦場に立っていた者は。

「ハッ、俺が本気でやればこんなもんだ」

「ふっ…君を少し見くびっていたようだな」

相変わらずの調子で、レイヴンは大鎌を下ろす。刀に宿った炎は、風に吹かれて消えたロウソクの火の如く、弱々しく消滅していった。一方、グレイシアは、先程立っていた位置から大きく後退しており、地面には彼女が吹っ飛ばされた際に、二本足で地面を抉って描いた軌跡が残った。

「一步も動かず君を倒そうとしたが…無理だったようだ」

「まあな…当たり前だぜ」

(一步も動いてないって!?)

マーガレットも、ギャラリー達も驚愕する。確かにグレイシアは、最初にいた位置から動かずに、レイヴンを一方的に攻撃していた。そんな化け物を後退させた、レイヴンの実力も凄まじいが。

ともかく、今の勝負はレイヴンの勝利。満場一致でそうかと思われたが。

「悔しいが俺の負けだ…足が…動かねえ」

突然、レイヴンは自ら負けを宣言し、肩を竦めた。

彼の足を良く見ると、氷が張られた地面が、両足を凍らせている。恐らく、爆風で吹っ飛ばされた時に、グレイシアが地面に氷を張り、レイヴンの足下を凍結させたのだろう。

「私を倒すには、一步及ばなかったようだな」

「ああ…てか、足冷てえんだよな」

二つの意味で冷めてしまったレイヴンは、急にダルそうな、やる

気の無い態度で、足下の氷をどうにかするように促す。

「うわー。レイヴンに賭けなきゃよかった」

「今日の昼ゲットだぜ」

ギャラリー達も、勝敗が決した途端散っていく。グレイシアに賭けた者は笑顔。レイヴンに賭けちゃった者は、残念そうに去っていく。

しかし、一番残念だったのは。

(レイヴンのバカ…負けてどうすんのよ!!!)

ババアの屈辱的敗北が見れなかったマーガレットは、怒りのあまり、地団駄を踏んだ。

「昔を思い出す。中々楽しかったぞ…また相手をしてくれ」

「ああ…次回は負けねえ」

握手を求めるグレイシアに、レイヴンは納得いかなそうな表情ではあったが、それでも握手には応じ、再戦の約束を交わした。

「…さて、暇になった。マーガレットを弄るか」

「やっ…やめてえ!!!」

正直。此方もギリギリだった事は、マーガレットが調子に乗ると嫌だったので伏せた。

そして、ポンと手を叩き、視線を彼女へと向けたグレイシアは、氷天華を構え、危険を察知して逃走した彼女を追って走り出した。

「オマエは、またガラスを割って…反省してないな!?!」

勝敗が決し、裏庭へと出てきたエストレアは、割られた窓ガラスを見てご立腹のようだ。前日はそれで罰を受けたというのに、イマイチ反省の色が伺えないと。

「してるよ。後悔はしてないがな」

「子供かオマエは!!!」

屁理屈をこねるレイヴンに、エストレアは思わず掴み掛かろうとするが、身長差を利用され、頭を押さえられてしまうと、どうしても手が届かない。

「子供はそっちだろ? 女みてえに小さい体しやがって」

「くう…それを言うなあ!!」

「肉を食え。野菜も採れ。そして良く寝ろボウズ」

気にしているとこをダイレクトに突かれ、顔を真っ赤に染めながらレイヴンの腕を払い除けたエストレアは、またムキになっては、軽くあしらわれる。

「まるで二人共…ゴホン」

二階の窓から、二人のやり取りを見て、アニマは呟く。今度から自分だけ部屋を変えた方がいいのだろうか。真剣に検討しようかと。

21話 四人で進む系（前書き）

海賊ネタの始まり。また狩猟の予感。



## 21話 四人で進む系

待ちに待った海賊討伐。レイヴン一行は、港に集結していた。

「では…早速、依頼内容と奴等の情報を」

以前、海賊討伐を依頼してきた、貿易商人の髭親父は、頼から流れ落ちる汗をハンカチで拭いながら、深刻な顔で切り出した。

「お願いします」

エストレアも、真剣な面持ちで、耳を傾ける。これから待ち受けるであろう脅威を打ち破り、依頼を成功に導くためにも、先ずは情報を聞きたい。

「海だーッ!!」

「っーかよ。何でオマエが着いてくるんだ。呼んでねえし」

「酷いわ!! 私だって皆と一緒に行きたいのに!!」

と、思っている傍から、海に来て変なテンションになったリア充学生の如く、海に向かって叫んでるアニマ。この前も来たくせに。

そして横では、呼んだ呼んでないで、何やら揉めているレイヴンとマーガレットの姿。

「くっ…遊びでやってるんじゃないんだよ!!」

エストレアは眉間にシワを寄せ、まるで海水浴にでも来たかのような皆のノリに、思わず取り乱してツツコミを入れた。

果たして、こんなメンバーで大丈夫なのか。

「ええと…よろしいですか?」

「続けて下さい」

暫くして、ようやく場も静まり、一同、気を取り直して本題に入る。

「奴等の本拠地、孤島に乗り込んで下さい。そして、海賊を可能な限り討伐し、捕らわれた商人達を救出して下さい」

「何だよ…人質がいるのか」

討伐以外にも仕事があると聞き、レイヴンは少しダルそうな表情で言う。

「奴等は身の代金を要求してきてます。我々が時間を稼ぐ間に救出を」

「そんなの楽勝よ」

しかし、内容は単純。マーガレットは鼻をフンと鳴らし、自信満々に答えるが。

「それが…奴等は海竜を従えてまして…そのせいで船が何隻を沈められてます」

「海竜、リヴァイア、を飼い慣らすなんて…流石は魚人海賊」

髭親父は、後から付け加えるように、海竜の存在を口にした。

確か海竜と言えば、この近海で暮らす野生モンスター、リヴァイア、が有名だった事を、エストレアは思い出す。

凶暴だが、自らのテリトリーに入らなければ何もしないモンスターを、意のままに操るとは流石だと、魚人共を賞賛しつつ、皮肉った。

「野生モンスターってキライ…」

「帰るなら今の内だぜ？」

また以前のように、蜂にビビって仕事にならないような事態に陥るくらいなら、帰った方が良い。レイヴンは冗談混じりでギルドに戻るように薦めるが。

「帰らないわよ。私は一人ぼっちは嫌なの」

単に一人が嫌という理由で着いてこられても迷惑だと、レイヴンは内心想う。

「女つてのは面倒だな。だったら、肝心なところで逃げんなよ？」

しかし、まあ。マーガレットとは一度組んで以来の仲だ。面倒臭い奴だが、来るならそれなりに働いてもらう。いざとなれば、海に落とせばいいわけだし。

「何言ってるの。ギルド最強候補の私が力を貸すのよ？ 寧ろ感謝

しなさい!!」

レイヴンのそんな思想も知らず、マーガレットは、相変わらずの自意識過剰な態度を全開にしてくる。こんな事なら、ストッパーにグレイシアも同行させるべきだったかと軽く後悔した。

とは言え、グレイシアは別件があるとかで、どの道来れなかったわけだが。

「よし、みんな。アレやろうよ」

話も纏まったところで、アニメは拳を前に突き出し、皆にもやるように促すが。

「そんな儀式みてえな事しなくたっていいだろが…」

「相変わらず冷たいなあ。今日こそは皆でやろう!!」

言わば、同意を得ていない強制参加。乗り気のアニマに、皆も空気に合わせて、仕方なく拳を突き出す。

「僕等はギルドの名に賭け、必ずこの依頼を成功させよう、ねっ!」?

「そつだなー」

「早く行きましょ」

「……ふん」

そして、この温度差。息の合わなさである。皆は気が済んだかと言わんばかりに、前回の依頼で使用したボ口船に向かって歩いていってしまう。

「全く皆は…最高だよ」

しかし、その噛み合わない反応こそがギルドメンバー。寧ろ、自分が求めていた反応はこれだったのだろうか。

## 22話 はじめてのおるすばん

ギルドメンバーを乗せたポロ船は、海賊の本拠地。孤島に近づいていた。

船員曰わく、本来は野生モンスターが暮らすだけの孤島だったが、今では魚人海賊の巣窟と化してしまっただけらしい。

それ以来、この海域は海竜だけでは無く、魚人にも注意しなければならぬ海となり、貿易業に大きな支障を与える結果となった。

「てなわけで、俺達はどうすりゃあいいんだ？」

何であれ、依頼者の敵はギルドの敵。目的は早めに遂行するのみだ。レイヴンは髭親父に指示を仰いだ。

「面倒ですが、皆さんはここで降りて、小型ボートで島へ迂回して下さい」

髭親父が指差した方向にある小型ボート。と、言っても、エンジンが積んであるわけでもない、単なる救命ボートなのだが。

「まっ、泳ぐよりマシか」

「ただけケチれば気が済むんだと思ったが、このまま泳ぐよりは遙かに良い。レイヴンは救命ボートへ向かって歩いていくが。」

「レイヴンは残ってよね」

「ああ？ 何でだよ？」

ふと、エストレアに呼び止められるレイヴン。ここまで来てお留守番とは、退屈過ぎて、とても納得出来ない。不満を露わにし、理由を問いたださそうとすると。

「島に着いたら交渉が始まる。もしもの時、戦える人間が残ったほうがいい」

「そんな洒落臭え……ああ、やっぱり残る」

と、流石は冷静なエストレア。もっともらしい正論が帰ってきた。レイヴンは反論しかけたが、今回の任務は人質の救出。行っても

大して面白くない事が予想される。

ならば、有事に備え、交渉中の用心棒として船に残るのも、また一興かもしれない。レイヴンはその指示に、同意する事にした。

「いいか。暇だからって、絶対に、此方から仕掛けるなよ？」

「そんな事しねえよ」

「怪しい」

「信用しろって」

エストレアの釘を刺すような物言いに、レイヴンは肩を竦める。

何故、そんなに疑われなければならないのか。さっぱり理解出来なかった。

一方、その頃。孤島の洞窟。魚人海賊団「ISONO」のアジトでは。

「船長。今日は貿易商人共が来る日ですぜ」

「来るDEATHY!!!」

魚人の子分達は、洞窟内の椅子に腰掛け、昏間から酒臭い息をプンプンとさせている、イソノ船長へ報告する。

「そうだなあ…ククツ。身の代金をた…っぷり、ふんだくってやる…!!!」

イソノ。もとい、ジョーンズは、頭から生えた髪の毛のような触手をうねうねと動かしながら、椅子から立ち上がる。

「…たく…女ならともかく。男なら金か物資にするしか価値がねえな…!!!」

そう言いながら、木製の檻に閉じ込められた貿易商人達に視線を向けるジョーンズ。欲求を満たせない男など、見せしめに殺しても良かったが、それでは一時は面白くても、後がつまらない。

「野郎共!!! 交渉中に奴等が妙な真似をしたら、容赦なく殺せ!!!」

「了解DEATHY!!! イソノ船長!!!」

「そつちで呼ぶなア!!!」

そして、舞台は再び大海原。レイヴンを残したボロ船を後にし、アニメ。エストレア。マーガレットの三人を乗せた窮屈な救命ボートは、遠回りに島を目指していた。

「うう…今時手動なんて」

「仕方ないさ。この船なら発見され辛いし」

マーガレットの愚痴に、アニメは苦笑して答える。

確かに遠回しで原始的な方法だが、だからといって飛行機を使って空から降下なんて真似は出来ないし、そもそも、其方の方が逆に目立つ。

「口はいいから、手を動かしてよね」

遠回しで原始的。それは確かに今世界で一番領けるが、喋るよりは、手を動かした方が良い。

オールを使って懸命に船を漕ぎ続けるエストレアは、二人に向かって注意する。

「もう、相変わらず堅いんだからあ」

「止せ、狭いんだから!!」

悪戯な笑みですり寄ってくるマーガレットに、エストレアは露骨に拒絶反応を示した。

何がそんなに嫌で、受け入れられないのか。無論、それは彼女の性格だ。

向こうに悪気は無いのだろうが、此方としては、もう少し自重してもらいたい。

と、いうより。歳の近い女性との付き合いは苦手なだけだが。

「そういうツンツンしたとこ、可愛いから好き」

「か、可愛いって言うなあ!!」

「はいはい、二人共。落ちないように何かに掴まって」

リア充チックに繰り広げられる青少年と少女の絡みを尻目に、アニメは複雑な模様を描いた、緑の魔法陣を形成させながら言う。

「…どうする気？」

怪訝そうなエストレアに、

「僕のフォース。属性は何だったかな？」

と、ウィンクして問い掛けてくるアニマ。

答える暇も無く、次の瞬間には、逆噴出された突風が、推進力となつて救命ボートを前進させていく。

「いざ、孤島へー!!」

このスピードなら、孤島に着くまでそう時間は掛からないだろう。

またまた場所は変わり、一足先に孤島に到着したボロ船を降りていく貿易商人達は、取引用に用意した、食糧等の物資が入った木箱を砂浜へ下ろしていく。

砂浜にビーチパラソルを刺して、海でも眺めてくつろぎたいが、今から始まるのは命懸けな交渉だ。レイヴンは、指示通り船から様子伺う。

暫くすると、魚人共が雁首を揃えて、ぞろぞろとジャングルの中から姿を現した。

「約束の品はあるんだろうなあ!？」

「其方こそ。人質の無事を確認したい」

「ゴチャゴチャうるせえ!! ブツが先だ!!」

「人質が先だ!!」

こんな具合に、お決まりなパターンで魚人と商人との交渉が始まった。

(大人しく人質を出さない事は予測済みってか…)

月並みな光景にレイヴンは皮肉った笑みを浮かべる。まあ、ここで人質が大人しく釈放されたら仕事にならないが。

後はここで、どれだけ時間を稼げるか。それが重要だ。

「つーか。やっぱり暇だな」

23話 海域の王者、リヴァイア現る！！（前書き）

不定期ですからっ！！  
ラ ア何とかなど知らん



## 23話 海域の王者、リヴァイア現る！！

孤島へと到着したギルドチームは、救命ボートを降り、ついに上陸を果たした。

「地図が示す通りなら、今はこの一番エリアだね」

アニマは依頼者に貰った孤島の地形図を広げ、辺りを確認する。

エリアによって番号が振り分けられてる、子供でも書けそうな曖昧な地図だが、現在の位置は、取引現場とは反対側の砂浜らしい。

そして、人質達が捕らえられている魚人のアジトのある洞窟は、島の中心にあるようだ。

「このまま進もう。野生モンスターに注意して」

目の前には高く聳え立つ崖が存在し、鳶を使えば登れるかもしれないが、リスクが高い。

よって、急がば回れ的な考えで、一同は左側の、海岸沿いに続く道を進み始めた。

「ブツを渡せ！！」

「人質が先だ！！」

（ああ…だりいな）

一方、その頃。船で一人お留守番のレイヴンは、相変わらず進まない交渉に飽き飽きしながら、その様子を眺めて欠伸した。

一体、この退屈は何時まで続くのか。マジに昼寝しても問題ないような気さえしてきたとこだが。

「立場が分かってないようだな…商人如きがよ」

どうやら、その心配も要らなくなったようだ。

魚人の手下を引き連れた船長服を身に付けた魚人は、一際目立った威圧感と異形の姿を現した。

（タコなのか？ イカなのか？）

レイヴンは、面と髪の毛みたいな触手がグロいという印象の他に、タコなのかイカなのか。それが分からなかった。

しかし、それでも奴等の親玉だという事は理解出来る。

向こうも何かしら罠を仕掛けてるだろうが、此方が罠を仕掛けているのかとか、考えているのか。

あの触手船長。よっぽど自信があるのか、それとも単に迂闊なのか。

果たして、奴等はどう動くのか。もう少し、この退屈な観察を続ける事にした。

「やれやれ…アイツ等は今頃何やってんだ？」

場所は再び、孤島の砂浜エリア。ギルドチームは、数匹のヤドカリの駆逐に手間取っていた。

「コイツ等、逃げても追ってくるよ!!!？」

「仕方ない…討つ!!」

しかし、相手は単なるヤドカリでは無い。

巨大な巻き貝を背負い、挟まれたら痛いでは済まない鋭利な鋏を構えて、横歩きにダッシュしてくる巨大なヤドカリ。通称、ヤドカニだ。

マーガレットは逃げようとするが、ヤドカニの方が圧倒的に素早い。一気に距離を詰められたところで、エストレアの振った剣の鋭い斬撃が、背中巻き貝ごと、体を両断した。

「食べたいと思わないかい？」

アニマも、剽軽にレイピアを突き刺し、迫り来るヤドカニを退治していく。

因みに。ヤドカニから採れるカニミノは旨いらしく、美食家は命懸けで此奴らをハントする。と、いう噂らしい。

「こんなの嫌よっ!!」

炎を纏ったブラッドローズを振るい、モグラ叩きの要領で砂浜から現れるヤドカニを抹殺していくマーガレットは、それを全力で拒

否した。

「今の内に次のエリアに移動するんだ!!」

エストレアの掛け声と共に、三人は走り出す。この海岸沿いの砂浜エリアを脱すれば、次はアジトへと続く洞窟のある砂浜エリアだ。

「あのバカガニ…もう追ってこないよね？」

少し走っただけで、もう息を切らしているマーガレットは、不安そうに後ろに目をやる。

あの横歩きダッシュの追跡。グレイシアに追い掛けられるのと同じくらいにトラウマになった。

「大丈夫だね。さて、道が分岐しているようだけど…」

アニマは再び地図を広げて確認をする。現在のエリアは、椰子の木が豊富な砂浜エリア。

そこから、アジトへと続いているであろう、二つの洞窟。

もう一つは、潮が引き、一時的に反対側の子島に渡れる砂の道となっているようだ。

「つまり、答えは二択…」

反対側の小島は論外。ならば進むべきは二つの洞窟のうち、どちらかだ。

困った事に、二つとも距離がそんなに変わらないのが悩みどころだ。

「せっかくだから僕は、真ん中の洞窟を選ぶよ」

何がせっかくなのか知らないが、アニマは真ん中の洞窟を選ぶ。

特に反対意見も無く、三人は洞窟へと足を踏み入れようとす。その時であった。

「この鳴き声は…!?!」

突然、海の方から、耳を撃くような咆哮が聞こえてきた。

「まさか…奴か!?!」

「えっ? 何々!?!」

耳を塞ぎ、何が起きてるのか全く分からないまま動揺するマーガ

レット。

そんな彼女を後目に、エストレアは、納めた二本の剣を再び抜刀して構える。

あの海域の王者と呼ばれし海竜、リヴァイア。奴が近付いているのだ。

「散開するんだ!!!」

最早、一刻の猶予も無い。エストレアの掛け声と共に、全員はエリアの別々の場所へ散った。

すると。まるで、大津波がやってきたかのように、咆哮の主。リヴァイアは、砂浜へと上陸してきた。

蒼空のように澄んだ竜鱗。強靱そうな大顎。水中では、まるで飛ぶように移動。地上では、四足で移動する、水陸共に活動可能な海竜だ。

だが、別に討伐する必要は無い。海竜なんて目的では無いのだから。

しかし、それは魚人とセットでないならの話だ。

「見つけたじゃえ…やれっ!!!」

海竜の背鰭に掴まっていたのか。魚人が姿を現した。

恐らく偵察だろう。魚人はにんまりと不快な笑みを浮かべると、直ぐに海竜を差し向けてきた。

「くっ…!!!」

海竜の口から、消防車の放水。或いはそれ以上の勢いで、水が吐き出される。

狙われたエストレアは瞬時に避けるが、高圧の水ブレスは椰子の木を見る見る薙ぎ倒してしまう。

「やれやれ、落ちろって!!!」

「うああ!!!?」

隙を見計らい、アニマは突風を起こし、リヴァイアの背中に乗っける魚人を地に落とす。

恐らく奴が司令塔。それを叩けば。と、考えていたのだが。

「ヒイ!? 俺は餌じゃ…止め、ギャー!!!?」

多分お腹が空いてたのか。海竜は魚人に目を向けるや否、そのまま噛み付き、丸呑みにしてしまった。どうやら、関係無いようだ。

「ッ…!!!?」

マーガレットは思わず絶句してしまう。熊とは比べものにならない凶暴性。

本当に、このモンスターを討伐できるのか。

皆に海竜をスルーして進もうと、呼び掛けようとした、その時。

「僕達なら出来る!! 僕達はアイゼンフォートのギルドメンバーだろ!?!」

その声は、果敢に立ち向かうアニマの声に掻き消された。

レイピアを構えて走り、リヴァイアの背後に素早く回ると、そのまま飛び掛かろうとする。

が、リヴァイアの長い尻尾が、それを邪魔する。

鞭のように振るわれた尻尾は、軽く八工を追い払うようにアニマを弾き飛ばした。

「アニマ!?!」

椰子の木に叩き付けられたアニマは、そのまま椰子の実と一緒に落下。エストレアは一目散に駆け寄り、命に別状は無いか確かめる。

「大丈夫さ…アーマが役に立った」

ぶつけた腰を押さえながら、アニマは苦笑いして立ち上がる。どうやら、着ていた防具がある程度役に立ったようだ。

「しかし、これは新調しないとね…」

とは言え。防具はRPGに例えれば下位装備。胸のアーマーには亀裂が走っていた。

外敵を補食対象と見たリヴァイアは、再び咆哮を上げ、次はマーガレットへ狙いを変え、迫ってくる。

「くっ、やってやるわよ…!!」

ブラッドローズを構え、強気な態度で挑むマーガレットだが、やっぱり腰が退ける。

リヴァイアは、目の前のマーガレットを邪魔と言わんばかりに、  
屈払うように前脚を動かす。

奴の鋭い爪は、人間の体なら勿論。たとえ鋼鉄の戦車でもバラバラに引き裂く程の力を持つと言われている。

「当たらないわよっ…!!」

しかし、動きとしては単調。それを、飛び上がって回避した彼女は、落下と共に、炎を宿したブラッドローズをリヴァイアの前脚へと振り下ろす。

「なっ…!？」

が、大鎌の刃はリヴァイアの堅牢な鱗を傷付けるだけに留まる。そうと分かると、瞬時に距離を置くマーガレット。

平然としているリヴァイアは、水のブレスを吐き出して、再びマーガレットを攻撃する。

「っ…!!」

マーガレットはそれを、瞬時に赤き光を放つ魔法陣を展開させる事で、水ブレスを受け止める。

水は魔法陣に触れた事で蒸発し、水蒸気を発生させながらその威力を弱めたが、それでも、衝撃は此方へ伝ってくる。

「そのまま耐えてろ…!!」

しかし、これはチャンス。リヴァイアがブレスを吐いている時は、大きな隙になる。

エストレアは二本の剣を構え、リヴァイアの背中へと飛び移った。リヴァイアは気配を感じ、ブレスを止めて、頭部を背中の方へと向けた。そして、飛び乗ったエストレアを振り落とそうと身体を動かす。

「喰らえ…!!」

バランスを崩し、振り落とされそうになるのを防ぐ目的と、奴にダメージを与えるため、二本の剣を背鱗へと突き刺すエストレア。

どうやら背鱗辺りの肉質は柔らかく、奴の弱点なのか、リヴァイアは呻き声を上げて抵抗する。

「僕達も反撃するよ？」

「言われなくてもっ…!!」

仲間が新たに生んだ隙は、無駄にはしない。

アニマとマーガレットは、武器へフォースの属性効果を付与していく。そして。

「勝利の風を我が剣へ…喰らえ、エアスラッシュュ!!」

「じゃあ私は、クリムゾンスラッシュュ!!」

お互いに振りかざした武器から、ネーミングセンスが厨二レベルの真空の刃。そして、紅蓮の刃が放たれ、同時にエストレアは、リヴァイアの背中から即座に待避する。

二つのフォースは身体に直撃し、リヴァイアはよろめきながら、地面へと大きな音を立てて倒れた。

「や、やったの…かな？」

「いや、まだだ…」

しかし、今ので終わる筈が無い。

エストレアの向けた視線の先には、リヴァイアが、ほぼ無傷に近い身体で、再び四本の脚で立ち上がる姿が映っていた。

「そんな…!？」

「まずいねえ…これは」

リヴァイアの咆哮が、鼓膜を突き破りそうな程、周囲に響き渡る。目は血走ったように赤く染まり、まさに、逆鱗に触れてしまった。と、という表現がピッタリだろう。

24話 黒鳥VS烏賊(前書き)

一分で終わる勢い



## 24話 黒鳥vs鳥賊

激昂したりヴァイアの、巨体を活かした突進が、木々を薙ぎ倒して此方へ迫ってくる。

エストレア達は散り散りに回避するが、リヴァイアの動きは怒りに駆られているとは思えない程、正確で素早い。

回避されたと分かると、直ぐに向きを変え、近くにいたアニマへと、噛み付き攻撃を繰り返して来る。

「僕は美味しくないよ!?!」

覆い被さるように迫る大顎を、後方にステップし避けたアニマ。リヴァイアは砂と雑草を食べるに止まった。

そこへ、空かさず攻撃を仕掛けるエストレア。狙いは柔らかい尻尾の部位。そのまま砂浜に顔をつっ込んで隙を作ったリヴァイアへ、二本の剣を振り下ろす。

「いけつ!!!」

剣は尻尾を捉え、斬られた部分からは鮮血が飛び散り、白い砂浜を赤く塗り替える。

しかし、幾ら柔らかくとも、リヴァイアにとっては些細な傷だ。直ぐに尻尾を振り回し、エストレアを牽制に追い払う。

「皆も尻尾を!!!」

先ずは、あの厄介な尻尾を切断する。エストレアは二人に、尻尾の部位破壊を指示した。

「了解。そういえば、尻尾には海竜の体内で稀に精製される玉があるらしいよ?」

その指示に、アニマま頷いてから言う。

どっかの狩人達は、海竜の鱗や甲殻を使った防具を生成するために、そのモンスターの素材を集めるらしい。その中でも、玉は希少な素材。売れば高額で取引される代物だ。

「本当に！？ 絶対に尻尾を切るわ！！」

「ハハッ、僕だつて譲れないよ？」

「全く…まあいい」

マーガレットとアニメは、欲望に染まった目をキラキラと輝かせ、海竜へと接近する。

その姿にエストレアは呆れて剣を構えるが、戦ってくれるだけマシだと、この場は堪える事にした。

一方、取引現場では。

「足りないだど！？」

「ああ、そうだ…この程度の物資じゃなあ」

魚人船長。ジョーンズが登場し、取引は更にカオスな展開になっていた。

（古い手口だぜ…）

その様子を静かに見守るレイヴン。

貿易商人達は、奴等が約束を素直に守らない事を予想していたとはいえ、露骨に破られた事に腹を立て抗議する。

「テムエ等への選択肢は二つに一つ。物資を増やすか、人質を見捨てて帰るかだ！！」

ジョーンズは一方的な要求と、触手を商人の一人へと叩き付け、仲間の商人達を脅しに掛かる。

「何をする！？」

「黙れ！！ 試しにコイツを殺してやろうか？」

一斉に退いていく商人達へ、更に脅しを掛けるジョーンズ。

触手が商人の首を縛るように巻き付けられ、その締め付けの強さは徐々に増していく。

「ぐああ…！！」

「俺様は本気だ？ どうするか考える？」

助けを呼ぶ声は魚人共の高笑い掻き消され、逃れようと手を伸ばす事も叶わない。

薄れていく意識の中、商人の男は、一条の光が触手を撃ち抜いていくのを見た。最初は、死の苦しみを和らげるため、自身が生み出した幻覚かと思った。

体が砂浜に落下し、仲間達が助け起こしに来るまで。

「なあんだ…!?」

千切れた触手を再生させ、光の弾道を目で追うジョーンズ。その視線の先には、漆黒のロングコートを風に靡かせ、船の甲板に佇んだ男が、待っていましたと言わんばかりに、笑みを浮かべていた。「そっちが先にやったんだ…遠慮無くやり返すぜ?」

此方から手は出さない。その約束は守った。後は魚を焼こうが煮ようが、全部個人の自由だ。

「ヒイ!? イソノ船長、アイツです!! アイツが例の恐ろしく強い奴です!!」「そっちの方で…なあんだと? テメエか…舐めた真似しやがったのは?」

「つーか、何処の日曜アニメの名字だよ? 次の日が鬱になるから止めるよ」

随分と月曜が嫌になりそうな名字だと言い、レイヴンは甲板から砂浜へと飛び降り、スタツと綺麗に着地した。

「助かった…でも、アンタ狙ってたな…?」

助け出された商人は、レイヴンへ向けて、皮肉混じりの礼を述べ微笑する。

「ハッ、さあな…」

レイヴンはそれを、何の事だとはぐらかし、商人達に下がってるように目で合図すると、愛用のビームガンを構える。

「野郎共、あの自信過剰な馬鹿を始末しろ!!」

ジョーンズは触手をウネウネ動かし、怒りを露わにする。そして、手下の魚人達へ戦うように命ずるが。

「えーと…そういえば、今日はタマに餌をやらないと…」

「いいから殺れ!!」

「痛ッ!? わっ、わかりましたー!!」

手下の魚人達は誤魔化すように拒んだ。が、しかし。ジョーンズは許さない。触手を鞭のように振るい、手下の魚人達の尻に叩き付ける事で、無理やり強要させる。

「上司に恵まれてねえな…まあいい。潰してやる」

手下の魚人達は、悲鳴にも似た雄叫びを上げ、此方へ迫ってくる。哀れだが、向かってくる奴は問答無用で消すまで。レイヴンの構えたビームガンが火を吹いた。

ビームは数匹の魚人に命中するも、運良く当たらなかつた奴もいる。魚人の振り下ろしたカットラスが、レイヴンの頭を捉える。

「死ねエ!!!」

カットラスは命中した。それを遮るように構えたビームガンにだ。「何ッ!?!」

「そんな汚い剣で斬れるワケねえだろ?」

所々錆び付き、刃の欠けた手入れ不足のカットラスでは、斬れるモノの斬れない。それだけ指摘すると、レイヴンの無慈悲な拳が、魚人の顎を砕くように振り上げられる。

「手加減は無しだ…死にたい奴だけ前に出ろ」

接近戦用の武器は持つてきていない。レイヴンは代用に、砂浜に突き刺さったカットラスを引き抜いた。

「数は…まあ大丈夫か」

そして、なまぐらの使用回数と、交換用の武器があるか。魚人の人数を数え、ざっと計算する。

「怯むな!!! 数では此方が上だ!!!」

あの時は三人。今は単独の相手ならまだ可能性がある。魚人達は息巻き、再び団結する。

「はあ…」

数とか言ってる時点で駄目だと、レイヴンは呆れて溜め息を吐いた。その隙に、魚人共が再び此方に迫る。

ここからは殆ど流れ作業。魚人が三又のスピアを突き刺してくれ

ば、掴んで腕ごと武器をへし折り、カッターで斬られそうになれば、刃を交え、近距離でビームをぶち込む簡単なお仕事だ。

「…っ!？」

次の敵はと、振り向いた瞬間。一発の鉛弾が頬を掠った。

レイヴンは弾道を探り、遠くから古臭いマスケツト銃を構えたお利口な魚人へ視線を向ける。

魚人は笑みを浮かべるレイヴンと目が合つと、ばつが悪そうに一歩ずつ退こうとする。

「やべっ!？」

「一発で殺せなかったのはミスだな…!!」

そう言い、一歩踏み込み、其方へ全力で駆けて行くレイヴン。

それを拒むよう。魚人共はどこかの歴史の教科書に載ってような鉄砲隊の如く、横一列に並び立ち、マスケツト銃を構え此方を狙う。

「下手くそだな…心臓はここだぜ!？」

レイヴンは挑発し、弾幕の嵐を正面から素早く避けていく。と、いうより。半分程当たってはいるのを受け流している。

「ひっ、来た…!？」

「ぐふえ!？」

「この野郎…!!」

魚人の一匹は、動揺してる間に至近距離まで接近され、腹に蹴りをお見舞いされる。

近くにいた魚人は、空かさずマスケツト銃を構え、レイヴンへ向けて引き金を引く。

「近距離でライフル射撃は不利だ…こう使え!!」

レイヴンは、とっさにマスケツト銃を掴んで銃口を体から逸らす。そして、そのまま銃を奪い取り、バットを振るが如く、魚人の顔

面へと叩き付けた。

「ひっ、人でなし…!!」

「ヒトデ？ テメエ等が言うか？」

あまりの暴虐っぷりに、魚人が悲鳴を上げるが、レイヴンは折れ

た銃を投げ捨て、そっちの外見と悪事。二つの意味で言い返してやった。

「クハハツ！！ 商人が雇った中では腕がいい方だが…お前は終わりだ」

後方で偉そうにふんぞり返っていたジョーンズは、レイヴンの実力を賞賛しつつ、いきなり終わりを宣言した。

「あア？」

「今まで色々な傭兵が俺様を狙ってきた…だがな。俺様を引っ張り出しのはテメエが初めてだ」

「ぷっ…アホが」

要するに、今まで来た傭兵は子分に倒される程不甲斐なく、船長がわざわざ出向く事は無かったらしい。

でも、そんな台詞をわざわざ言うのは死亡フラグだと、レイヴンは思わず吹き出してしまった。

「野郎共…コイツは俺様が消す！！」

ジョーンズは子分達を下がらせると、腰に携えた金色の鞘からサーベルを抜き、右手に構える。

「ハツ、そういう姿勢は嫌いじゃねえぞ？」

雑魚がワラワラ湧いてくるより、代表が一騎打ちを申し出てくる方が良い。

コイツも軽く叩きのめす。この時までは、イカの相手なんか息をするより容易い事だと思っていた…。

25話 触手責めの回(前書き)

さぼってない。ちょっと忙しかったただけさ…。(汗)

## 25話 触手責めの回

遙か昔。とある島で、二人の剣豪が戦った記録が歴史の教科書に残されている。

砂浜に漂う緊張感。今この孤島も、そんな風に重ねて見る事が出来た。

相手が蛸人間だというのが、少々残念だが。

「海賊流奥義：触手剣！！」

何が海賊流かは知らないが、ジョーンズは腕から更に触手を増やして伸ばす。そして、触手を器用に動かし砂浜に散らばったカットラスを拾い上げ、計八本の剣に加え、手持ちのサーベルを構えた、云わば九刀流という無茶苦茶な型を取る。

「オイオイ…俺が拾う分を」

「うるせえ！！」

レイヴンの軽口を一蹴すると、ジョーンズは剣をブンブン回転させ此方へ迫ってくる。

「ハッ、多ければ勝てるってか？ 砂糖より甘えぞ！！」

四本の剣が同時に振り下ろされても尚、レイヴンは動じない。ジリジリと押されながらも、構えたカッターで冷静に受け止める。

「っ！？」

「先ず一つ…」

空かさず、もう片手に構えたビームガンが、ジョーンズの触手を捉え、至近距離で放たれた。

「ぬお！？」

「二つ。三つ。四つ！！」

ずっと俺のターンの如く、レイヴンは作業感覚で無慈悲にトリガーを引いていき、ジョーンズの触手を一つ一つ部位破壊していく。

千切れて砂浜に落下した触手が本体を離れても尚、うねうね動いているのは少々グロかったが、これで触手野郎は戦意を失った。と、



思いきや。

「何だ…効かねえな!!」

言いながら、ジョーンズは破壊された触手を再生させると、余裕の笑みを浮かべ、再び武器を取る。

「喰うらえい!! 海賊流奥義。荒波旋風!!」

悪態つく暇も無く、ジョーンズは剣を交互に振り回し、砂を巻き上げ、衝撃波を起こして攻撃を仕掛けてくる。

だが、そんな当たり前の芸等、自身にも可能だ。レイヴンもカットラスを振り上げ、衝撃波を飛ばし相殺させようと試みるが。

「…ッ!？」

ぶつかり合った衝撃波は、相殺するかに見えた。が、ジョーンズの放った衝撃波は、此方の衝撃波を突破し、真っ直ぐレイヴンに襲い掛かってきた。

対応に遅れたレイヴンは、そのまま海の浅瀬へと吹っ飛ばされてしまう。

「俺様を雑魚と侮っただろ? それは違うぜ」

「確かに…ちと、遊び過ぎたな」

ジョーンズの発言と、浸透してくる海水のせいで服が肌に張り付き、不快感が増す。

「海賊流奥義。荒波旋風・烈!!」

息つく暇も無く、再びジョーンズの攻撃が始まる。

ダサい技名からして、先程とは違うパターンだと察知すると、レイヴンは直ぐ様、場を離れる。

そして、予想通り連続で放たれてきた衝撃波は、砂浜を深く深く抉り取り、先程のよりも鋭さを増している事が分かる。

「やべえな…ムカつく」

完全向こう側のペースで、此方の見せ場が奪われている事にレイヴンは立腹し、反撃に転ずじようと再び動き出す。

ジョーンズの方は、剣を振り回し衝撃波を放ってくるが、そう何度も喰ってやる程暇では無い。一気に距離を詰めたレイヴンは、そ

のまま坂手に持ったカットラスを構え、ジョーンズの心臓部を狙って突き刺そうとする。

「試してみるかア？」

「黙ってる……!!」

心臓へと迫る刃先を、ジョーンズは避けようとしめない。

当然だが、カットラスはジョーンズの心臓部を綺麗に貫いた。

「やった!!」

「船長を倒した!!」

「……いや、まだだ」

ジョーンズが砂浜に膝を折り、隠れていた商人達からも歓喜の声上がる。が、明らかに怪しいと思っただレイヴンは、カットラスから手を離し後ろへ下がる。そして、続けて言う。

「で……それは何のトリックだ？」

「教えてやる……俺様は不死身だつてよオ!!」

突き刺さったカットラスを触手で引き抜き、ジョーンズはニタニタと笑みを浮かべる。

「確かに……心臓が無いんじゃ殺せねえか」

レイヴンは気付く。そこにあるべき臓器が奴には無い。他に殺す方法は幾らでもあるだろうが、あの厄介な蘇生能力に関係しているのも恐らく心臓。現時点で、此方が不利なのは明確だ。

「不死の力を手に入れた俺様は無敵だツ!!」

「ハッ、救えねえな!!」

だが、諦めない。寧ろ劣勢は大歓迎だ。レイヴンはビームガンを構え、迫るジョーンズの触手。が、持っている剣を撃ち抜く。

「武器を狙うかア!!」

「コイツで最後だ!!」

触手は狙っても無意味だ。全ての剣を破壊され、一瞬怯むジョーンズ。残るは手に持つサーベルのみ。

しかし、そのサーベルはエネルギー弾を鏡に反射した光のように、意図も容易く弾いた。

「また何かトリックかよ？」

「コイツは特別でなア…その程度じゃ効かないんだよ！！」

「てめえ…人をムカつかせるの得意だろ？」

なまくらとは違うサーベルから、銀色の輝きが不気味に光る。恐らくだが、大陸連合なんかでも採用されてる、対ビームコーティングか何かだろう。

ここまでやられると、最早コイツを天才と呼んだ方が良いかもしれない。

「うるせエ！！」

懐まで飛び込んできたジョーンズは、サーベルを横風ぎに振るった。

レイヴンはビームガンで防ごうと受け止めた。が、銃身は徐々にまるで包丁で切られた豆腐の如く切り裂かれてしまう。ビームセイバーに続き、長年付き合ってきた相棒がまた一つ失われてしまった。

「くそっ！？」

「スミアタック！！」

一気に技名が単純になったと思えば、ジョーンズの口から黒くてネバネバした液体が、レイヴンの顔目掛けて至近距離で放出された。

「……！？」

「続けて触手攻撃！！」  
突然視界が真っ暗になり、怯むレイヴン。そこへジョーンズの触手が気味悪く迫る。

「てめえ！？」

「へへへっ…もう逃がさないぜ」  
ヌルヌルした触手はレイヴンの五体を縛り上げ、服の隙間からもウネウネ侵入してきた。

変な感触に思わず立ってしまふ。鳥肌がある。

「ちよ待て！！ これは尋常じゃねえくらいキモい！！」

今まで経験してきた戦いでも、こんな気持ち良い。ではなく、悪い攻撃をされたのは初めてだ。

「ああ…あのままでは触手に犯されてしまう…！」

「誰得なの？」

緊縛され緊迫した場面で、レイヴンの耳に隠れていた商人達の声が聞こえてきた。後で殴ろう。

「げへへっ…触手は王道。正義だ…！」

「クソツタレ…こんな奴にッ…！」

でも、決して身体が感じたりはしない。感じるのは湧き上がる殺意のみ。果たして、男が触手に縛られるキモい戦いの行く末はどうなってしまうのか。そもそも需要はあるのか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6654u/>

---

GUILDWORKER

2011年11月7日03時30分発行